

かな や みなみ い せき
金屋南遺跡

2010

本庄市遺跡調査会

序

本庄市は、中世においては武蔵七党の中でも最大の勢力を誇った児玉党の本拠地であり、室町時代末期から活躍をはじめめる金屋鋳物師の懸仏や鰐口、仏像などの鋳造品は、県内はもとより広く他県においても知られています。児玉市街には鎌倉街道上道がとおり、また近世には中山道一の宿場町として繁栄を誇りました。市内には、埼玉県重要選定遺跡である長沖古墳群や旭・小島古墳をはじめ、旧石器時代から近代まで、数多くの遺跡が分布しています。

本書は、平成5年に株式会社木下工務店による建売住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として実施した、本庄市児玉町金屋に所在する長沖古墳群金屋南地区の発掘調査の成果を記録したものです。この発掘調査では、中世金屋鋳物師に関連すると考えられる製鉄炉等が確認され、貴重な資料を得ることができました。

本庄市という地域の歴史に対する理解を深めるための一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、文化財の保護に対する深いご理解とご尽力を賜りました株式会社木下工務店をはじめ、関係諸機関ならびに関係各位、さらに住民の皆様の多大なるご協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

本庄市遺跡調査会
会長 茂木 孝彦

例 言

1. 本書は埼玉県本庄市児玉町大字金屋字南 51-4 他に所在する、金屋南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は住宅建設に伴う事前の記録調査として、平成 5 年 7 月 21 日から平成 5 年 9 月 30 日の期間で実施した。
3. 発掘調査は業務委託を受けた旧児玉町遺跡調査会が実施し、その調査担当には鈴木徳雄、尾内俊彦があたった。
4. 発掘調査から本書刊行に至る経費は、すべて株式会社木下工務店が負担した。
5. 整理調査は、本庄市遺跡調査会が株式会社歴史の杜に委託した。
6. 本書の執筆は、第 I 章を本庄市教育委員会事務局が、第 II 章以降を向出博之（株式会社歴史の杜）が行った。ただし第 II 章は村上章義・倉田功（株式会社歴史の杜）が第 1・2 図の作成を行った。
7. 本書の編集は向出が担当した。
8. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他報告書に関する資料は、本庄市教育委員会において保管している。
9. 整理作業・報告書作成は次の方々に参加した。（敬称略・五十音順）

篠原信子、田中浩江、深井美紀

ただし遺物写真撮影は、山際哲章が行った。

10. 本書で使用した遺構写真は、調査担当者が撮影した。
11. 本書中の遺構の略号は、以下のとおりである。
S K = 土坑 S D = 溝跡 S X = 性格不明遺構 P i t （調査時は P と表記）= ピット
12. 本報告書作成にあたり、遺構の追加、欠番は以下のとおりである。
 - ・ S K 33 ~ 47 を新たに追加した。
 - ・ S K 5、P i t 4、8 を欠番とした。
 - ・ 落ち込みを性格不明遺構とした。
13. 第 1 図は国土地理院発行 1/25000「藤岡」「本庄」を使用した。
14. 第 3 図に記した X Y 座標値は、世界測地系による新座標値で、カッコ内の数値は調査当時の旧座標値である。
15. 遺構図中に示した方位記号は座標北を示す。
16. 本書に掲載している遺構図ならびに遺物実測図の尺度は以下を原則とし、各挿図中にはスケールを付してある。

[遺構図]

調査区全体図…1/100 土坑およびピット、溝跡平面・断面図…1/60

特殊燃焼坑平面・断面図…1/40

[遺構実測図・拓影図]

縄文土器・石器・かわらけ・陶器・瓦…1/4 銭貨…1/1

17. 遺構図中の断面水準線数値は、海拔標高を表わしている。単位は m で表している。
18. 遺物の出土地点については、図示したうえでトーンを入れた。
19. 遺物観察表の口径・底径・器高・長さ・幅・厚さの単位は cm で、重さは g で表している。また、数値についている（ ）は推定、[] は残存を表す。
20. 遺物の色調は『新版標準土色帳』（2001 年版）による。

長沖古墳群金屋南地区発掘調査組織 児玉町遺跡調査会（平成5年度：抜粋）

会 長	富丘文雄	児玉町教育委員会教育長
理 事	田島三郎	児玉町文化財保護審議委員長
	清水守雄	児玉町文化財保護審議委員
	武内和雄	児玉町文化財保護審議委員
	野口敏雄	児玉町文化財保護審議委員
	小島和子	児玉町文化財保護審議委員
	大塚 勲	児玉町教育委員会社会教育課長
幹 事	吉川敏男	児玉町教育委員会社会教育課課長補佐
	清水 満	〃 社会教育係長
	田島賢二	〃 社会教育係
	恋河内昭彦	〃 社会教育係
	徳山寿樹	〃 社会教育係
調査員	鈴木徳雄	児玉町教育委員会社会教育課社会教育係
	尾内俊彦	児玉町遺跡調査会調査員

長沖古墳群金屋南地区整理・報告組織 本庄市遺跡調査会（平成22年度）

会 長	茂木孝彦	本庄市教育委員会教育長
理 事	清水守雄	本庄市文化財保護審議委員
	腰塚 修	本庄市教育委員会事務局長（会長代理）
監 事	八木 茂	本庄市監査委員事務局長
	田島弘行	本庄市会計課長
幹 事	金井孝夫	本庄市教育委員会文化財保護課長（事務局長）
	鈴木徳雄	〃 副参事兼課長補佐
	太田博之	〃 埋蔵文化財係長
	恋河内昭彦	〃 埋蔵文化財係主査
	大熊季広	〃 埋蔵文化財係主査
	松本 完	〃 埋蔵文化財係主任
	松澤浩一	〃 埋蔵文化財係主任
	的野善行	〃 埋蔵文化財係臨時職員

目次

序	第2項	ピット	17	
例言	第3項	溝跡	19	
目次	第4項	特殊燃焼坑	21	
	第5項	その他の遺構	23	
第I章	発掘調査に至る経緯	第6項	遺構外出土遺物	23
第II章	遺跡の地理的・歴史的環境	第IV章	まとめ	24
第III章	検出された遺構と遺物	参考文献		
第1節	遺跡の概要	写真図版		
第2節	検出された遺構と遺物	報告書抄録		
第1項	土坑	奥付		

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	第10図	土坑出土遺物3	16
第2図	金屋南遺跡調査区位置図	第11図	ピット	18
第3図	調査区全体図	第12図	溝跡1	19
第4図	土坑1	第13図	溝跡2	20
第5図	土坑2	第14図	溝跡出土遺物	20
第6図	土坑3	第15図	特殊燃焼坑	21
第7図	土坑4	第16図	その他の遺構と出土遺物	22
第8図	土坑出土遺物1	第17図	遺構外出土遺物	23
第9図	土坑出土遺物2			

表目次

第1表	土坑出土遺物観察表	第3表	その他の遺構出土遺物観察表	22
第2表	溝跡出土遺物観察表	第4表	遺構外出土遺物観察表	23

写真図版目次

写真図版1	調査区全景（南西から）	写真図版4	第2、3、8、9、10、12、14号土坑出土遺物
	第8号土坑完掘状況（北から）	写真図版5	第15、16、18、23、32号土坑出土遺物
	第15号土坑礫出土状況（北から）		第2、5号溝出土遺物
写真図版2	第16号土坑礫出土状況（東から）		第3・4・5号溝出土遺物
	第31号土坑完掘状況（南西から）		第1号性格不明遺構出土遺物
	第1～5号溝および第3号土坑礫出土状況（東から）		土間状遺構出土遺物
写真図版3	第3～5号溝礫出土状況（西から）		遺構外出土遺物
	特殊燃焼坑礫出土状況（東から）		
	特殊燃焼坑完掘状況（西から）		

第 I 章 発掘調査に至る経緯

本報告にかかる長沖古墳群金屋南地区の発掘調査は、建売住宅建設に伴って失われる埋蔵文化財の記録保存のために実施されたものであり、発掘調査に至る経緯の概要は、下記のとおりである。

平成 2 年 8 月 20 日、株式会社木下工務店代表取締役社長木下長志より埼玉県児玉郡児玉町大字金屋（現本庄市児玉町金屋）字南 51 - 7・51 - 10 の土地、合計 330.26㎡に建売住宅建設の計画があり、これにかかる『開発予定地内における埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の照会文書が（旧）児玉町教育委員会〔以下（旧）を省略〕に提出された。当該区域は周知の埋蔵文化財包蔵地である、長沖古墳群（No.54-300）に該当していることから、町教育委員会は平成 2 年 8 月 28 日付児教社第 210 号「文化財の所在及び取り扱いについて」において、周知の埋蔵文化財包蔵地内であるため現状変更しようとする場合は事前に町教育委員会と協議するとともに、埋蔵文化財の包蔵状況を確認するための試掘調査を実施し、文化財保護法の規定に則って事業を実施するよう回答した。この回答を受け、平成 2 年 9 月 1 日、株式会社木下工務店代表取締役社長木下長志より「試掘調査依頼書」が町教育委員会に提出され、平成 2 年 9 月 27 日に試掘調査を実施し、中世金屋鋳物師関連の製鉄炉と考えられる遺構等の埋蔵文化財の所在が確認された。この試掘調査の結果を踏まえ、町教育委員会は平成 2 年 10 月 1 日付児教社第 259 号で、「文化財の所在確認試掘調査の結果について」において、当該区域に埋蔵文化財が確認され現状保存が望ましく、やむをえず現状変更する場合は、事前に町教育委員会と協議し、文化財保護法第 57 条の 2 の規定により、埋蔵文化財発掘届提出するよう回答した。平成 5 年 3 月 9 日、上記の土地についての照会文書が、再び株式会社木下工務店代表取締役社長木下長志より児玉町教育委員会に提出された。町教育委員会は、平成 5 年 3 月 10 日付児教社第 344 号「文化財の所在及び取り扱いについて」を回答し、株式会社木下工務店と埋蔵文化財保護のための協議を行った。しかし建設計画の変更は困難であるとの結論に達し、事業主より児玉町遺跡調査会長に発掘調査の依頼がなされ、児玉町教育委員会の指導に基づいて、児玉町遺跡調査会と株式会社木下工務店との間で埋蔵文化財保存事業委託契約を締結し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘の実施にあたり、株式会社木下工務店代表取締役社長木下長志より、平成 5 年 7 月 15 日に文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が町教育委員会に提出され、同日付児教社第 108 号で埼玉県教育委員会教育長に進達した。この発掘の届出に基づいて、埼玉県教育委員会教育長より平成 6 年 1 月 25 日付け教文第 3 - 545 号で、株式会社木下工務店代表取締役社長木下長志に「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知があり、文化庁の指導による土木工事等の着工前の発掘調査実施の指示があった。

また発掘調査の実施にあたり、平成 5 年 7 月 15 日、児玉町遺跡調査会長富丘文雄より文化財保護法第 57 条第 1 項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が町教育委員会に提出され、平成 5 年 7 月 15 日付児教社第 108 号で埼玉県教育委員会教育長に進達した。この届出に基づいて、平成 6 年 1 月 25 日付教文第 2 - 184 号で、発掘調査の指示を含む「埋蔵文化財の発掘調査について」が埼玉県教育委員会教育長から児玉町教育委員会教育長に通知され、児玉町遺跡調査会長富丘文雄に伝達された。

（本庄市教育委員会文化財保護課）

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

金屋南遺跡が所在する児玉町は、平成 18 年 1 月 10 日に旧本庄市と合併し、新「本庄市」となった。本遺跡は埼玉県本庄市児玉町金屋字南 51-4 他に所在する(1)。本庄市児玉町は埼玉県北部に位置する。この地域は関東平野の中央部から西部にあたる埼玉平野の西縁部に位置し南西には関東山地がせまる、平野と山地の境界に相当する地域である。地形は八王子構造線を境に南西側の上武山地と、北東側の平野部とに大別される。

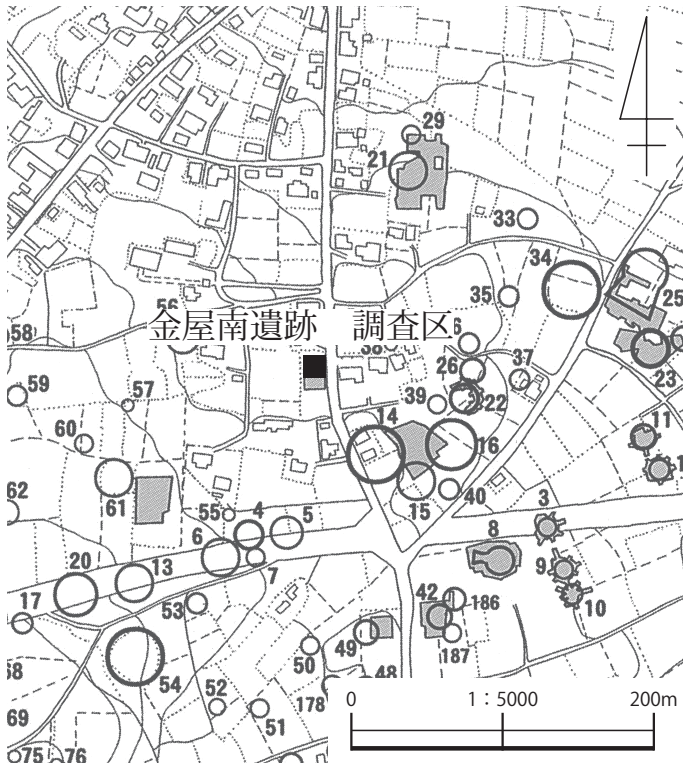
本遺跡は児玉丘陵上に立地している。この丘陵は上武山地から、八王子―高崎構造線を境にして、北東方向に半島状に幾筋も伸びている。児玉丘陵の南側には本庄台地が広がり、その間には女堀川沖積低地が北東方向に向かって帯状に開けている。

なお児玉町の山地は、ほぼ全体が「三波川結晶片岩」と呼ばれる岩石で構成されている。「三波川」は群馬県旧鬼石町の神流川の支流の名称である。この岩石は古くから庭石や板碑として使われてきた。同じ岩石は関東のみならず長野県南部、東海・近畿地方、紀伊半島、四国、九州北東部まで約



第 1 図 遺跡の位置と周辺の遺跡(国土地理院発行1/25000「藤岡」「本庄」を使用)

1. 金屋南遺跡 2. 横尾後遺跡 3. ミカド西遺跡 4. ミカド遺跡 5. 篠城址 6. 塩谷下大塚遺跡 7. 観音山遺跡 8. 峯別所遺跡 9. 十二天遺跡 10. 乙中ノ堰遺跡 11. 一町田遺跡 12. 枇杷橋遺跡 13. 念仏塚遺跡 14. ウリ山遺跡 15. 倉林後遺跡 16. 倉林後B遺跡 17. 高柳南遺跡 18. 金屋池脇遺跡 19. 倉林東遺跡 20. 金屋北原遺跡 21. 金屋西遺跡 22. 長沖梅原遺跡 23. 長沖久保遺跡 24. 八幡山埴輪窯跡 25. 雉岡城址 26. 江ノ浜遺跡 27. 賀家上遺跡 28. 仲町遺跡 29. 女池遺跡 30. 秋山大町遺跡 A. 長沖古墳群



第2図 金屋南遺跡調査区位置図
(大熊2003より加筆して転載)

墳輪窯跡(24)、長沖古墳群(A)、仲町遺跡(28)、乙中ノ堰遺跡(10)、金屋西遺跡(21)である。なお、児玉町には埼玉県最古の4世紀中ごろに築造された、鷲山古墳がある。また本遺跡を包含している長沖古墳群は古墳時代中期、後期に帰属する。第2図に記された丸印が古墳を示しており、本遺跡が古墳群の中に位置することが分かる。この古墳群では横穴式石室が多く採用され、石室の構築には前述の三波川結晶片岩を使用している。

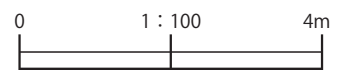
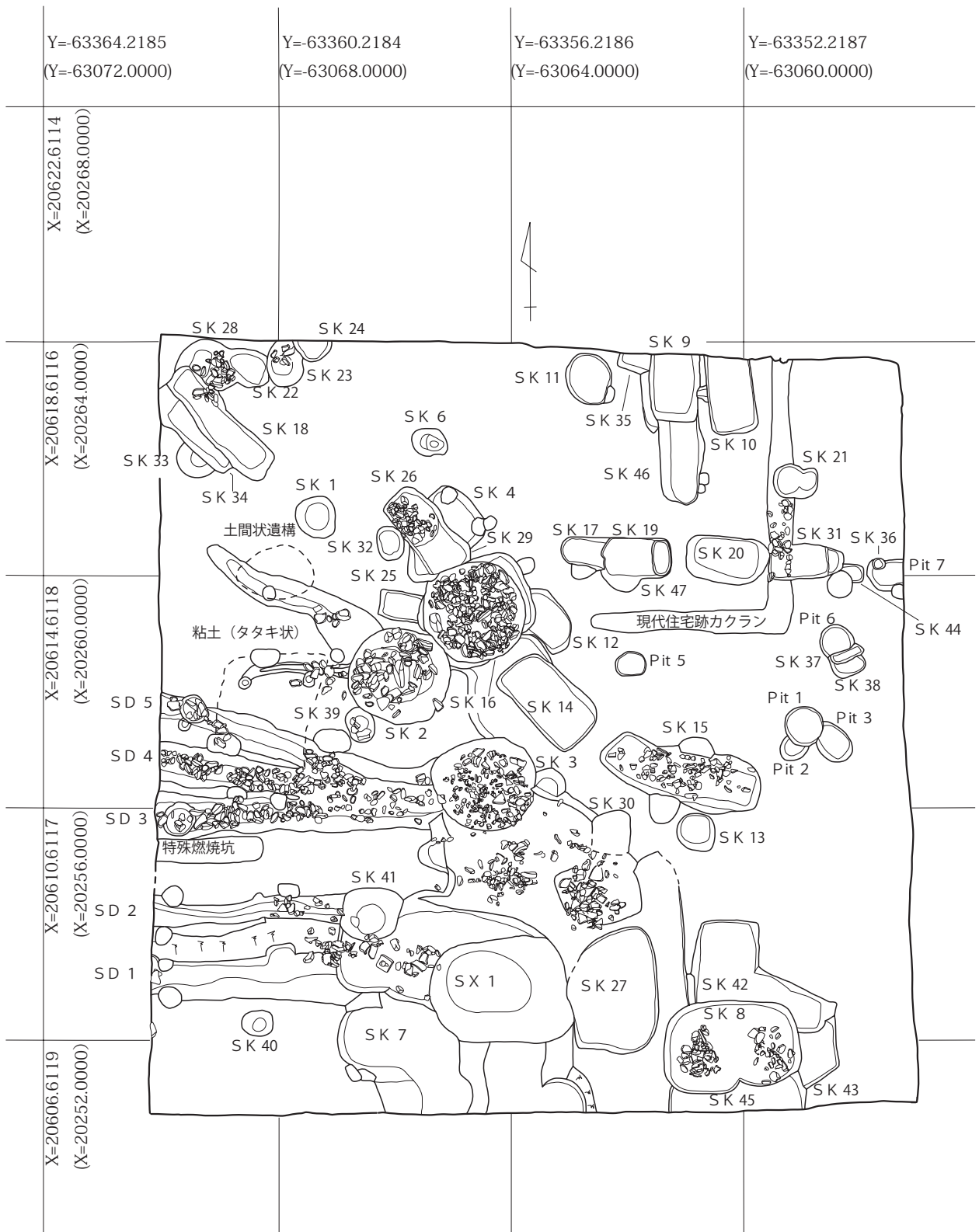
奈良・平安時代の遺跡は横尾後遺跡、十二天遺跡、ミカド遺跡、ミカド西遺跡、塩谷下大塚遺跡、金屋北原遺跡、一町田遺跡、枇杷橋遺跡である。なお、金屋・共和地区には児玉条里水田が広がっている。

中・近世の遺跡は篠城址(5)、観音山遺跡、倉林後B遺跡、倉林東遺跡、雉岡城址(25)、金屋西遺跡、真鏡寺館址である。真鏡寺館址は児玉党塩谷氏の館址と考えられている。児玉町内には鎌倉街道が通り、児玉党武士が鎌倉へと出仕していた。雉岡城址は八幡山城とも呼ばれるが、関東管領山内上杉氏が築城した城である。金屋西遺跡では、この時期の墓壇群が検出され、長期にわたり墓域として位置づけられていた。また、本遺跡の所在する金屋地区は鋳物業が盛んであり、近世の頃には重要な地場産業であった。金屋地区の鋳物師は金屋鋳物師と呼ばれ、中林家と倉林家の二家を中心となっていた。金屋鋳物師の活躍は室町時代末期から見られ、懸仏や鰐口などをはじめ仏像・仏具を鋳造していた。その後、日用品や農具類を鋳造していたが、川口鋳物におされ衰退していったものの昭和初期まで営業していたようである。本調査においては、鋳物業が行われたことを示す根拠の一つとして、スラグ(鉄滓)の集中が認められ、本遺跡から南西に1kmほど離れた金屋西遺跡の調査でも、A・Bの両地点から出土している。

1000kmの範囲で分布している(三波川変成帯)。なお、三波川結晶片岩は本遺跡で、縄文時代の石器石材として使用されている。

さて、本遺跡周辺に分布する縄文時代遺跡は、横尾後遺跡(2)、観音山遺跡(7)、峯別所遺跡(8)、倉林東遺跡(19)、ウリ山遺跡(14)、高柳南遺跡(17)、長沖梅原遺跡(22)、長沖久保遺跡(23)、江ノ浜遺跡(26)、賀家上遺跡(27)である。しかし児玉地域では、縄文時代後期から遺跡数が減少し弥生時代までその傾向が続く。なお塩谷下大塚遺跡(6)で弥生時代後期の方形周溝墓群が出ている。

古墳時代になると遺跡数は増加するようである。古墳時代の遺跡は、十二天遺跡(9)、ミカド遺跡(4)、ミカド西遺跡(3)、塩谷下大塚遺跡、金屋北原遺跡(20)、一町田遺跡(11)、金屋池脇遺跡(18)、念仏塚遺跡(13)、枇杷橋遺跡(12)、倉林後遺跡(15)、倉林後B遺跡(16)、長沖久保遺跡、八幡山



第3図 調査区全体図 (1/100)

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

本調査では土坑 46 基、ピット 6 基、溝 5 条、特殊燃焼坑 1 基、土間状遺構 1 基、などを検出した。土坑やピットに関しては年代が不明である。溝 5 条は近現代のものと思われる。土間状遺構では新しい瓦が出ているので、近現代のものである可能性が高い。遺物は縄文土器、石器、埴輪、かわらけ、陶器、瓦と多種多様に見られるが、遺構に伴うと考えられるものはほとんど無いようである。

縄文土器は中期に属するものが多い。石器もそれに伴うものであろう。埴輪は、長沖古墳群で見られるものと類似する。遺構の内外を問わず、様々な時代のものが出土し埴輪の破片が含まれることから、周囲の土砂（長沖古墳群の範囲内のもの）が本調査区に流れこんだか、運びこまれたと考えることができる。

第2節 検出された遺構と遺物

第1項 土坑

第1号土坑（第4図1）

本土坑は、調査区北西側に位置する。規模は南北 75cm、東西 70cm を測る。平面形状は円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、深さは最大 33cm である。

第2号土坑（第4図2、第8図1～3、第9図4、第1表、図版4）

本土坑は調査区中央から、やや西寄りに位置する。本土坑は粘土（タタキ状）の範囲と重複関係にあり、本土坑の方が古い。規模は南北 1.6 m、東西 1.8 m を測る。平面形状は円形を呈する。壁は急に立ち上がり、深さは最大 48cm である。礫が大量に出土している。遺物は縄文時代中期に該当する土器片と石器に加え、近現代の瓦状の資料が出土している。

第3号土坑（第4図3、第9図5～9、第1表、図版2・4）

本土坑は調査区中央から、やや南西寄りに位置する。規模は南北 1.6 m、東西 1.8 m を測る。平面形状は円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、深さは最大 54cm である。礫が大量に出土している。遺物は縄文時代中期に該当する土器片や石器、そして丸瓦、施釉陶器が出土している。

第4号土坑（第4図4）

本土坑は調査区中央から北寄りに位置する。第 26・29 号土坑と重複関係にあり、本土坑は両者よりも古い。規模は南北 1.15 m、東西 57cm 以上を測る。楕円形ないし隅丸方形を呈する。壁はやや急に立ち上がり、深さは最大 34cm である。

第6号土坑（第4図5）

本土坑は調査区北壁中央から、やや南寄りに位置する。規模は南北 45cm、東西 60cm を測る。平面形状は楕円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、深さは最大で 15cm である。

第7号土坑（第4図6）

調査区南壁中央より、やや西のあたりに位置する。本土坑は攪乱を受けている。規模は南北 1.1 m、東西 2.1 mを測ると思われる。平面形状は攪乱のため分からない。壁はやや急に立ち上がり、深さは最大 28cm である。

第8号土坑（第4図7、第9図10、第1表、図版1・4）

本土坑は調査区南東隅に位置する。第42・43・45号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が新しい。規模は南北 1.5 m、東西 2.3 mを測る。平面形状は不定形を呈する。壁はやや急に立ち上がり、深さは最大 30cm である。なお、平面形状から考えると、本土坑は二つの土坑である可能性がある。土坑内の東西2箇所、礫が集中している。遺物は磨石、円筒埴輪片が出土している。

第9号土坑（第5図12、第9図11・12、第1表、図版4）

本土坑は調査区北壁東側に位置する。第35・47号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が新しい。規模は南北 1.15 m以上、東西 80cm を測る。平面形状は長方形を呈する。壁は急に立ち上がり、深さは最大 65cm である。遺物は縄文時代中期の土器片が出土している。

第10号土坑（第5図12、第9図13～15、第1表、図版4）

本土坑は調査区北壁東側に位置する。規模は南北 1.32 m、東西 77cm を測る。平面形状は長方形を呈する。壁は急に立ち上がり、深さは最大 40cm である。遺物は縄文土器片、磨石、円筒埴輪片が出土している。

第11号土坑（第4図8）

本土坑は北壁中央付近に位置する。攪乱を受けている。規模は南北 85cm、東西 78cm を測る。平面形状は、円形ないし楕円形を呈すると思われる。壁はやや急に立ち上がり、深さは最大 18cm である。

第12号土坑（第4図9、第9図16、第1表、図版4）

本土坑は調査区中央から、やや北寄りに位置する。規模は南北 1.2 m、東西 65cm を測る。平面形状は楕円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、深さは 15～20cm である。遺物は砥石が出土している。

第13号土坑（第4図10）

本土坑は調査区中央より南東側に位置する。規模は南北 60cm、東西 65cm を測る。平面形状は円形を呈する。壁は急に立ち上がり、深さは最大 30cm である。

第14号土坑（第4図11、第10図17、第1表、図版4）

本土坑は調査区中央に位置する。規模は南北 1.74 m、東西 95cm を測る。平面形状は長方形ないし隅丸方形を呈する。壁は急に立ち上がり、深さは最大 52cm である。遺物は石皿の破片が出土しており、側面には窪みが見られる。

第 15 号土坑 (第 5 図 13、第 10 図 18・19、第 1 表、図版 1・5)

本土坑は調査区中央から東寄りに位置する。規模は南北 80cm、東西 2.45 m を測る。平面形状は長方形を呈する。壁は急に立ち上がり、深さは最大 50cm である。本土坑は形が不均一であり、特に東側で攪乱を受けている可能性がある。礫が大量に出土している。遺物は縄文時代中期の土器片と打製石斧が出土している。

第 16 号土坑 (第 5 図 15、第 10 図 20～22、第 1 表、図版 2・5)

本土坑は調査区中央から、北寄りに位置する。第 2・12・25・29 号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が新しい。規模は南北 1.7 m、東西 1.75 m を測る。平面形状は円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、深さは最大 60cm である。遺物は凹み石と羽口が出土している。羽口に付着している溶着滓は、肉眼による観察による限りでは、第 17 図 3 のものと同じもののようである。両者ともガラス質の光沢をもつ。

第 17 号土坑 (第 5 図 14)

本土坑は調査区中央から北東方向に位置する。第 19 号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が古い。南側で攪乱を受けている。規模は南北 50～56cm、東西 70cm を測る。平面形状は楕円形を呈すると思われる。壁は急に立ち上がり、深さは最大 35cm である。

第 18 号土坑 (第 6 図 18、第 10 図 23、第 1 表、図版 5)

本土坑は調査区北東隅に位置する。第 28 号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が古い。規模は南北 2.32 m、東西 50～65cm を測る。平面形状は長方形を呈する。壁は急に立ち上がり、深さは最大 50cm である。礫が若干出土している。遺物は片岩製の砥石と思われるものが出土している。

第 19 号土坑 (第 5 図 14)

本土坑は調査区中央から北東方向に位置する。本土坑は第 17・47 号土坑と重複関係にあり、第 17 号土坑より新しく、第 47 号土坑より古い。南側で攪乱を受けている。規模は南北 67cm、東西 1.18 m を測る。平面形状は隅丸方形を呈する。壁はやや急に立ち上がり、深さは最大 60cm である。

第 20 号土坑 (第 6 図 19)

本土坑は調査区中央から、北東方向に位置する。規模は南北 73～80cm、東西 1.4 m を測る。平面形状は楕円形ないし隅丸方形を呈する。壁はオーバーハング気味に立ち上がり、深さは最大 47cm である。なお第 4、5 層は、本土坑に対して攪乱の可能性がある。

第 21 号土坑 (第 7 図 20)

本土坑は調査区北東隅に位置する。規模は南北 50～58cm、東西 75cm を測る。平面形状は楕円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、深さは最大 17cm である。

第 22 号土坑 (第 6 図 18)

本土坑は調査区北西隅に位置する。第 23 号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が古い。規模は南北 63cm、東西 65cm 以上を測る。平面形状は楕円形を呈すると思われる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、途中から若干傾斜が緩くなる。深さは最大 38cm である。

第 23 号土坑 (第 5 図 16、第 10 図 24～26、第 1 表、図版 5)

本土坑は調査区北西隅に位置し、北壁に接している。第 24 号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が古い。規模は南北 80cm 以上、東西 60cm を測る。平面形状は楕円形を呈する。壁はやや急に立ち上がり、深さは最大 30cm である。遺物は縄文時代中期に該当する土器片が出土している。

第 24 号土坑 (第 5 図 16)

本土坑は調査区北西隅に位置し、北壁に接している。第 23 号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が新しい。規模は南北 45cm 以上、東西 70cm を測る。平面形状は円形ないし楕円形を呈する。壁はやや急に立ち上がり、深さは最大 35cm である。

第 25 号土坑 (第 5 図 15)

本土坑は調査区中央から、北西に位置する。第 16 号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が古い。規模は南北 48cm、東西 65cm を測る。平面形状は長方形を呈する。壁は急に立ち上がり、深さは最大 28cm である。

第 26 号土坑 (第 7 図 21)

本土坑は調査区中央より、やや北寄りに位置する。第 4 号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が新しい。規模は南北 1 m 以上、東西 77cm を測る。平面形状は壁は急に立ち上がり、深さは最大 38cm である。礫が大量に出土している。

第 27 号土坑 (第 5 図 17)

本土坑は南壁の中央部付近に位置する。規模は南北 2.1 m、東西 1.5 m を測る。平面形状は楕円形に近い不定形である。壁は緩やかに立ち上がり、深さは最大 10cm である。

第 28 号土坑 (第 6 図 18)

本土坑は調査区北東隅に位置する。第 18 号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が古い。規模は南北 93cm、東西 78cm 以上を測る。平面形状は円形を呈すると思われる。壁は緩やかに立ち上がり、深さは最大 17cm である。礫が出土している。

第 29 号土坑 (第 7 図 21)

本土坑は調査区中央から、北寄りに位置する。第 16 号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が古い。規模は南北 1.55 m 以上、東西 70～80cm を測る。壁の立ち上がりは不明である。深さは 28cm 以上である。

第 30 号土坑（第 7 図 22）

本土坑は調査区中央から、南寄りに位置する。本土坑は南隣の礫が集中している箇所により切られているようである。規模は南北 75cm、東西 62cm を測る。平面形状は不定形である。壁は緩やかに立ち上がったのち、段がついて再び急に立ち上がる。深さは最大 39cm である。本土坑では図示していないが、スラグが集中している。熱いうちに土坑に入れられたのか、壁が一部焼土化している。

第 31 号土坑（第 6 図 19、図版 2）

本土坑は東壁近くの調査区北東側に位置する。規模は南北 58cm、東西 1 m を測る。平面形状は隅丸方形を呈する。壁は垂直に立ち上がり、深さは最大で 67cm である。上層は現代住宅跡の攪乱を受けている。

第 32 号土坑（第 7 図 23、第 10 図 27、第 1 表、図版 5）

本土坑は調査区中央から、北西方向に位置する。規模は南北 60cm、東西 46cm を測る。平面形状は楕円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、深さは最大 18cm である。遺物は縄文時代中期に該当する土器片が出土している。

第 33 号土坑（第 6 図 18）

本土坑は調査区北西隅に位置する。第 34 号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が古い。規模は南北 40cm 以上、東西 70cm を測る。平面形状は円形を呈すると思われる。壁は緩やかに立ち上がり、深さは最大 20cm である。

第 34 号土坑（第 6 図 18）

本土坑は調査区北西隅に位置する。第 33 号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が新しい。規模は南北 50cm 以上、東西 1.7 m 以上を測る。平面形状は長方形を呈する。壁は段がついて緩やかに立ち上がり、深さは最大 32cm である。

第 35 号土坑（第 5 図 12）

本土坑は北壁中央から、東寄りに位置する。第 9 号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が古い。規模は南北 30cm 以上、東西 50cm 以上を測る。平面形状は不明である。壁は急に立ち上がり、深さは最大で 40cm である。

第 36 号土坑（第 6 図 19）

本土坑は東壁の北側に位置する。規模は南北 18cm、東西 20cm を測る。平面形状は円形を呈する。壁はオーバーハング気味で、垂直に立ち上がり、深さは最大 15cm である。

第 37 号土坑（第 11 図 3）

本土坑は東壁中央付近に位置する。第 38 号土坑と第 6 号ピットと重複関係にあり、本土坑が最も新しい。規模は南北 20cm、東西 60cm を測る。平面形状は楕円形を呈する。壁は垂直に立ち上がり、

深さは最大 25cm である。

第 38 号土坑 (第 11 図 3)

本土坑は東壁中央付近に位置する。第 37 号土坑と重複関係にあり、本土坑のほうが古い。規模は南北 25cm 以上、東西 50cm を測る。壁は垂直に立ち上がり、深さは 10cm と思われる。

第 39 号土坑 (第 4 図 2)

本土坑は調査区中央から西側に位置する。第 2 号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が古い。規模は南北 60cm、東西 45cm を測る。平面形状は楕円形を呈する。深さは 25cm である。

第 40 号土坑 (第 12 図)

本土坑は調査区南西隅に位置する。規模は南北 45cm、東西 50cm を測る。平面形状は円形を呈する。壁はやや急に立ち上がり、深さは最大 33cm である。

第 41 号土坑 (第 12 図)

本土坑は調査区中央から、南西寄りに位置する。第 2 号溝と重複関係にあり、本土坑の方が新しい。規模は南北 90cm、東西 95cm を測る。平面形状は円形に近い、不定形を呈する。深さは 75cm である。

第 42 号土坑 (第 4 図 7)

本土坑は調査区南東隅に位置する。第 8・43 号土坑と重複関係にあり、第 8 号土坑より旧く、第 43 号土坑より新しい。規模は南北 1.47 m 以上、東西 2.35 m 以上を測る。平面形状は不定形を呈する。壁は急に立ち上がり、深さは 45cm である。

第 43 号土坑 (第 4 図 7)

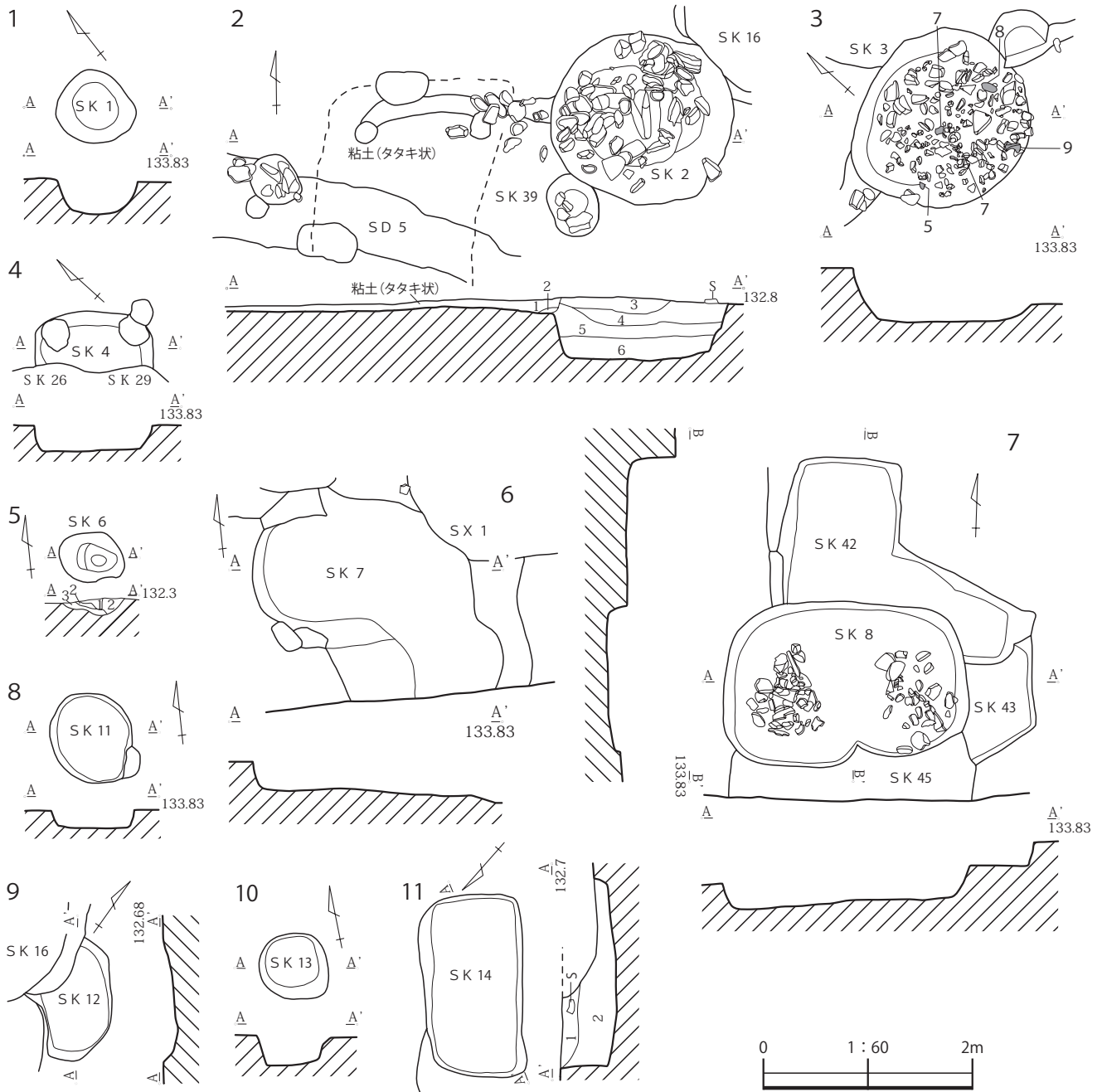
本土坑は調査区南東隅に位置する。第 8・42 号土坑と重複関係にあり、本土坑は両者よりも古い。規模は南北 80cm 以上、東西 60cm 以上を測る。平面形状は不定形を呈する。壁は急に立ち上がり、深さは最大 24cm である。

第 44 号土坑 (第 6 図 19)

本土坑は東壁北側付近に位置する。第 31 号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が古い。規模は南北 30cm、東西 40cm 以上を測る。平面形状は楕円形を呈すると思われる。壁はやや急に立ち上がり、深さは最大 13cm である。

第 45 号土坑 (第 4 図 7)

本土坑は第 8 号土坑と重複関係にあり、本土坑のほうが古い。規模は南北 60cm 以上、東西 2.4 m を測る。壁は急に立ち上がり、深さは最大 40cm である。



SK 2・土間状遺構 土層説明(2. SPA - A')

- 第1層 明黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。
- 第2層 明黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを少量均一に含み砂粒を微量混入する。しまり、粘性共に有する。
- 第3層 暗茶褐色土 ローム粒を均一に含む。また第2～3層にかけて大形の礫を多量に含む。しまり、粘性共に有する。
- 第4層 暗茶褐色土 ローム粒、ロームブロックを均一に、礫を微量含む。しまり、粘性共に有する。
- 第5層 暗褐色土 ローム粒、砂粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。
- 第6層 暗褐色土 ロームブロックを少量含み粘土を混入する。しまり、粘性共に強い。

SK 6 土層説明(5. SPA - A')

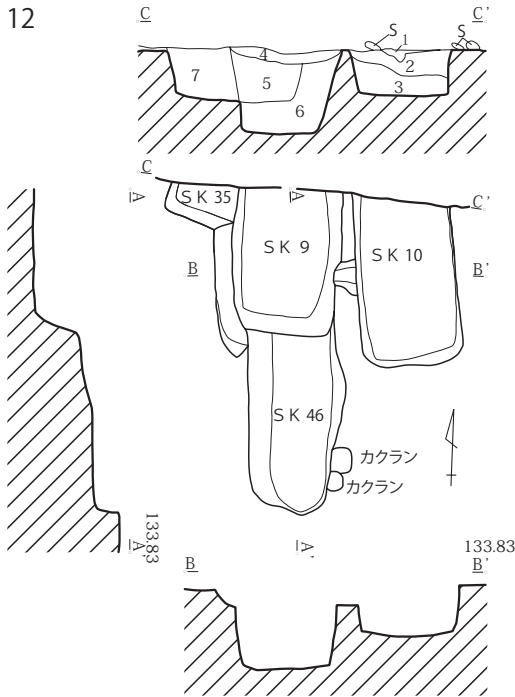
- 第1層 明黒褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを均一に含む。しまり弱い。粘性なし。
- 第2層 暗褐色土 ローム粒を少量、ロームブロックをまばらに含む。しまり、粘性共にやや弱い。
- 第3層 暗茶褐色土 ロームブロック、ローム風化土を主体とし、黒褐色土を少量混入する。しまり、粘性共にやや弱い。

SK 14 土層説明(11. SPA - A')

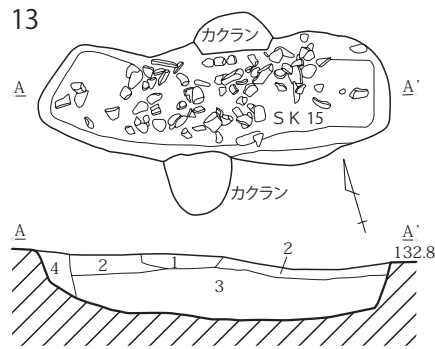
- 第1層 明黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを少量含む。しまり、粘性共に有する。
- 第2層 暗茶褐色土 ローム粒、ロームブロックを少量含む。炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。

第4図 土坑1

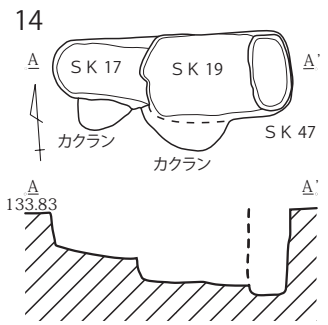
12



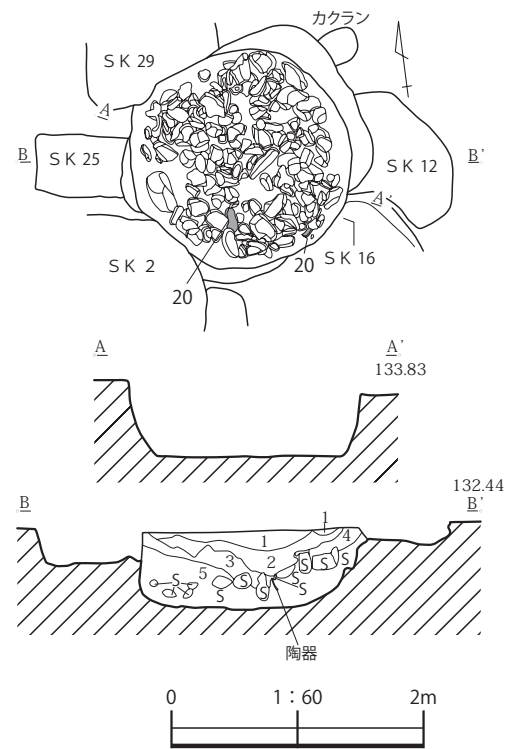
13



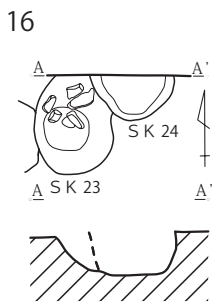
14



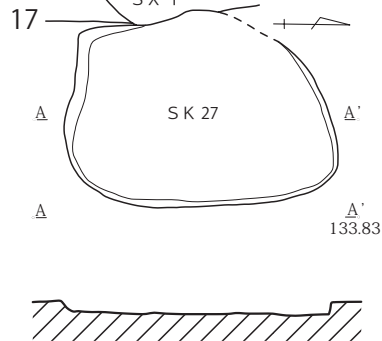
15



16



17



SK 9・10 土層説明(12. SPC-C')

- 第1層 灰茶褐色土層 細かいローム粒 (ϕ 1mm以下) が含まれる。しまり、粘性共に弱い。
- 第2層 黒褐色土層 黒土主体、ローム粒 (ϕ 1cm以下) 点在。しまり、粘性共に弱い。
- 第3層 茶褐色土層 ローム粒 (ϕ 1cm程) 均等に分布。黒土少々点在。しまり、粘性共に弱い。
- 第4層 茶褐色土層 細かいローム粒 (ϕ 1cm程) と焼土粒が点在。しまり、粘性共に弱い。
- 第5層 茶褐色土層 細かいローム粒 (ϕ 1cm程) 多数と小石点在。しまり、粘性共に弱い。
- 第6層 茶褐色土層 ロームブロックとローム粒 (ϕ 1cm程) 多数点在。しまり、粘性共に弱い。
- 第7層 茶褐色土層 細かいローム粒 (ϕ 1cm程) 多数と小石点在。しまり、粘性共に弱い。

SK 15 土層説明(13. SPA-A')

- 第1層 明黒褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを少量含む。しまり、粘性共にやや弱い。
- 第2層 明黒褐色土 ローム粒を均一に炭化物粒を微量含み、茶褐色土を混

入する。しまり粘性共にやや弱い。

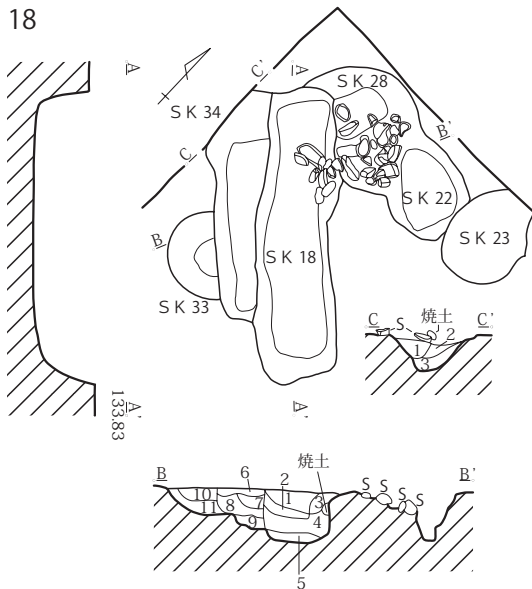
- 第3層 明黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを少量均一に、礫を多量に含む。しまり、粘性共に有する。
- 第4層 暗茶褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む。しまり、粘性共に有する。

SK 16 土層説明(15. SPB-B')

- 第1層 茶褐色土 ϕ 1mm以下のローム小粒子を含む。 ϕ 2~5mmの粒子も点在。 ϕ 5~15mmのブロックいくらか有り。しまりやや弱い。粘性弱い。
- 第2層 茶褐色土 第1層よりやや明るい茶褐色土。 ϕ 1~2cmのロームブロックが主体。 ϕ 3~5cmのロームブロックも見られる。しまり、粘性やや弱い。
- 第3層 明茶褐色土 ϕ 1~5mmのローム小粒子を含む。しまり、粘性共にやや弱い。
- 第4層 明黒色土 ϕ 2~5mmのローム小粒子を含む。しまり、粘性ともにやや弱い。
- 第5層 明茶褐色土 第3層よりやや明るい明茶褐色土。 ϕ 5mm以下のローム小粒子を含む。 ϕ 2~3cmのロームブロックまばらに有り。しまり、粘性共に弱い。

第5図 土坑2

18



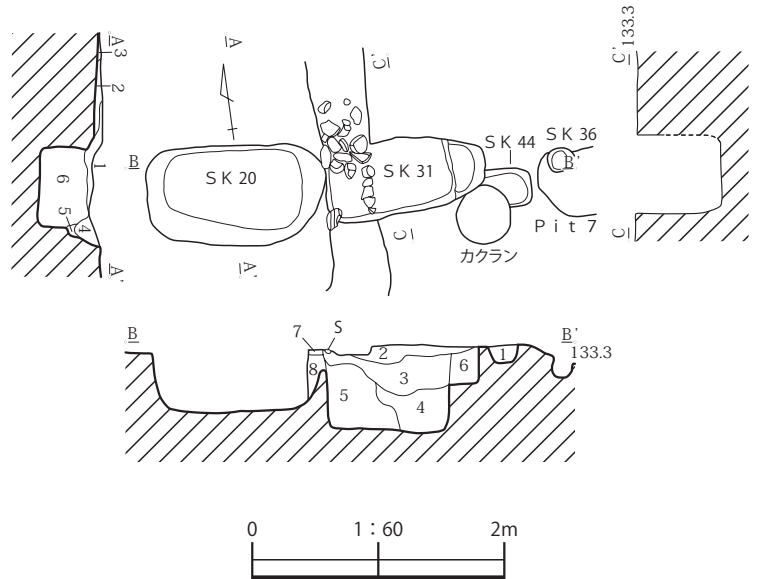
SK 18・28 土層説明 (18. SPB-B')

- 第1層 灰黄色土層 黒色土粒 (φ 5mm以下)、焼土粒 (φ 1mm以下)、白色粘土粒 (φ 7mm以下) まばらに含む。しまりやや弱い、粘性弱い。
- 第2層 茶褐色土層 ロームブロック (φ 3cm以下) 多量に含む。しまり弱い。粘性やや弱い。
- 第3層 明茶褐色土層 ローム粒 (φ 5mm以下)、焼土粒 (φ 3mm程度) 含む。しまりやや弱い。粘性弱い。
- 第4層 明茶褐色土層 ローム粒 (φ 7mm以下)、ロームブロック (φ 1.5cm程度) 第2層ほどではないが多量に含む。第3層よりも若干明るい。しまり、粘性やや弱い。
- 第5層 茶褐色土層 ロームブロック (φ 2~3cm) まばらに含む。所々、若干黄色めの染みがある。しまりやや強い。粘性弱い。
- 第6層 暗茶褐色土層 ローム粒 (φ 1cm以下) 比較的均等に含む、所々に黒色土粒混入。しまりやや弱い。粘性弱い。
- 第7層 茶褐色土層 色は第2層よりも若干明るい。上部にロームブロック含む。下部へ移行するほどロームは細かく混じってゆく。下部にφ 1.5cm程の焼土粒あり。しまりやや弱い。粘性弱い。
- 第8層 明茶褐色土層 ロームブロック (φ 2cm程度) を含む。層中では左側の方が若干黄色っぽい。しまり弱い。粘性やや弱い。
- 第9層 茶褐色土層 ローム粒 (φ 1cm以下) がまばらに点在。第5・6層の中間的な色である。しまり、粘性共に弱い。
- 第10層 暗茶褐色土層 ローム粒 (φ 1.5cm) 点在。灰黄色土ブロック、白色粒子ブロック含む。しまり、粘性共に弱い。
- 第11層 明茶褐色土層 ローム粒 (φ 1cm以下)、黒色土粒 (φ 1~3mm程度) 含む。しまり、粘性共に弱い。

SK 34 土層説明 (18. SPC-C')

- 第1層 黒褐色土層 ローム粒子とロームブロックを多量に含む。しまり、粘性共に有する。
- 第2層 黒色土層 ローム粒子を多量に含む。しまりなし。粘性を有する。
- 第3層 黒褐色土層 ローム粒子とロームブロックを量に含む。しまりなし。

19



粘性を有する。

SK 20 土層説明 (19. SPA-A')

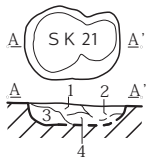
- 第1層 暗褐色土 ローム粒を多量に、浅間A軽石、炭化物粒を少量、焼土粒を微量含む。しまり、粘性共にやや弱い。
- 第2層 明黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に、炭化物粒を少量含む。しまりを有する。粘性は弱い。
- 第3層 暗茶褐色土 ローム粒を少量、焼土粒、炭化物粒を少量含む。しまりを有する。粘性は弱い。
- 第4層 明黒褐色土 ローム粒、浅間A軽石を少量、ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性共にやや弱い。
- 第5層 明黒褐色土 炭化物粒を少量、ローム粒を微量含む。しまり弱い。粘性なし。
- 第6層 茶褐色土 火山灰粒を大量に含む、ザクザクとした感がある。ローム粒、ローム小ブロックを均一に含む。

SK 20・31 土層説明 (19. SPB-B')

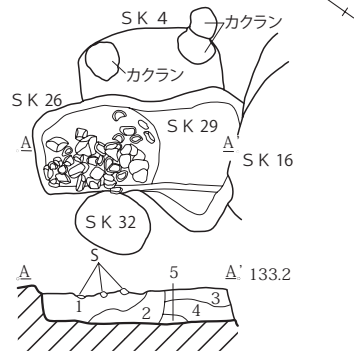
- 第1層 暗茶褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。
- 第2層 暗褐色土 炭化物粒を斑点状に、ローム粒、焼土粒を微量含む。しまり強く、粘性を有する。
- 第3層 茶褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物粒を均一に含む。しまりを有する。粘性は弱い。
- 第4層 明茶褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを多量に含む。しまり、粘性共にやや弱い。
- 第5層 褐色土 ロームブロック、ローム粒主体の層。炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。
- 第6層 茶褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを均一に、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。
- 第7層 暗褐色土 炭化物粒を少量、ローム粒を微量含む。しまりを有する。粘性は弱い。
- 第8層 暗茶褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを均一に含む。しまり粘性共になし。

第6図 土坑3

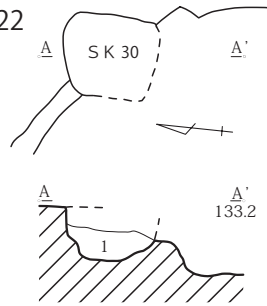
20



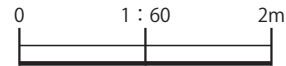
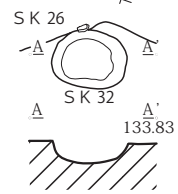
21



22



23



SK 21 土層説明 (20. SPA-A')

- 第1層 茶褐色土 現代住宅基礎部による掘り込み。ロームブロック炭化物粒を含むが、ガラス片等が混じる。硬くつきかためてある。
- 第2層 暗茶褐色土 ローム粒を少量、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共にやや弱い。
- 第3層 明黒褐色土 ローム粒を均一に、ローム小ブロックを微量含む。しまり弱い。粘性なし。
- 第4層 茶褐色土 ローム粒を多量に、ロームブロックを少量含み、小砂利を少量混入する。しまり弱い。粘性なし。

- 第2層 明黒褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを多量に、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共にやや弱い。
- 第3層 暗茶褐色土 ローム粒、小砂利を少量、ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。
- 第4層 明黒褐色土 ローム粒を均一に、小礫、ローム小ブロックを少量含む。しまり、粘性共にやや弱い。
- 第5層 黒褐色土 ローム粒を多量に含む。しまり、粘性共にやや弱い。

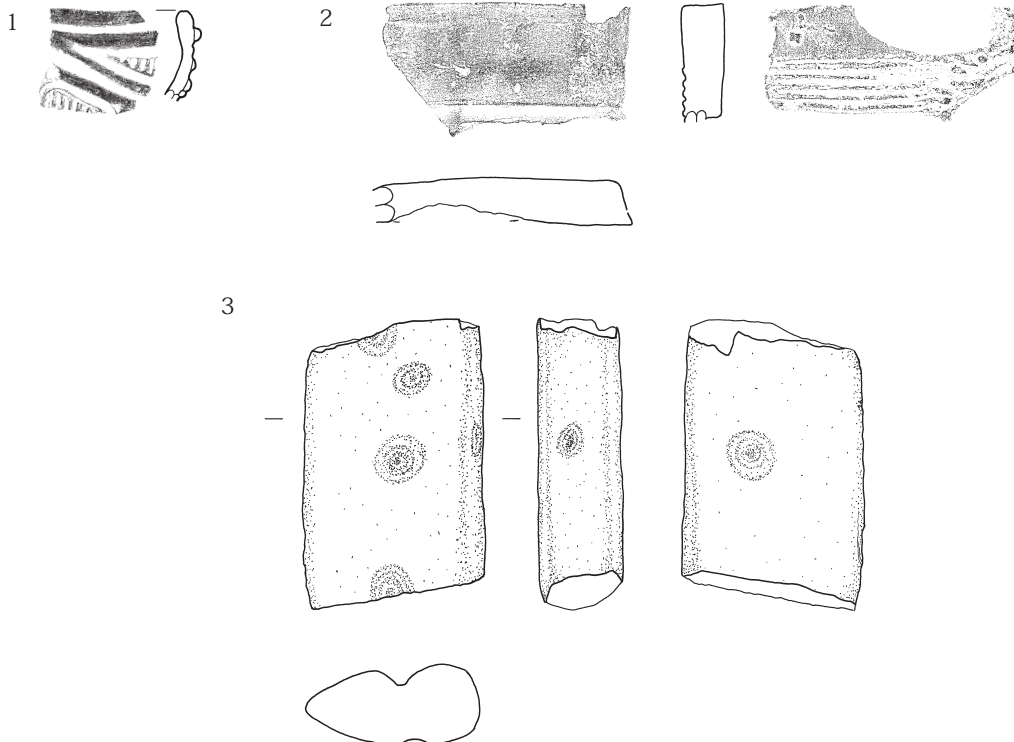
SK 30 土層説明 (22. SPA-A')

- 第1層 茶褐色土 スラグ主体の層。鉄サビの為少々赤っぽい。スラグが熱いうちに入れられたのか、壁面は一部焼土化している。しまりを有する。粘性なし。

SK 26・29土層説明 (21. SPA-A')

- 第1層 明黒褐色土 ローム粒、ローム小ブロック、礫を均一に、粘土粒、粘土ブロックを少量含む。しまり、粘性共にやや弱い。

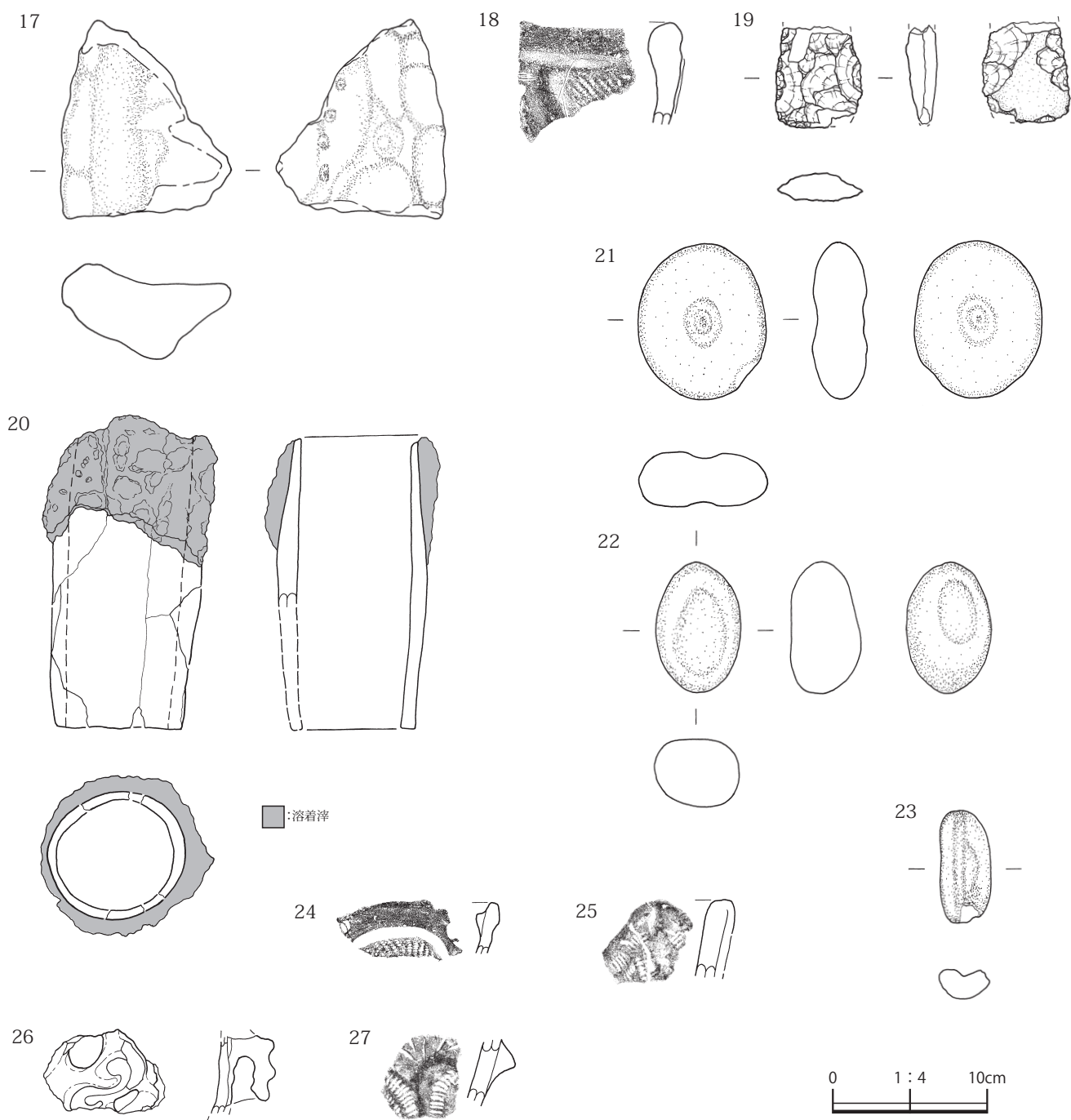
第7図 土坑4



第8図 土坑出土遺物1



第9图 土坑出土遺物 2



第10図 土坑出土遺物3

第46号土坑 (第5図12)

本土坑は第9号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が古い。規模は南北1.4m、東西80cmを測る。平面形状は楕円形ないし隅丸方形を呈すると思われる。壁は急に立ち上がり、深さは最大33cmである。

第47号土坑 (第5図14)

本土坑は調査区中央から、北東寄りに位置する。第19号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が新しい。規模は南北60cm、東西33cmを測る。平面形状は楕円形を呈する。壁は垂直に立ち上がり、深さは

No.	種別・器種	法量	文様・器面調整・備考	①胎土 ②色調	残存度	注記
1	縄文土器 深鉢		隆帯による三角形区画文。	①白色粒・黒色鉱物 ②内外にぶい橙色	口縁部片	SK-2No.2
2	瓦質 瓦状	長さ：(6.8) 幅：(12.4) 厚さ：(2.0)	凹凸面ナデ。裏側に溝がつく。	①黒色粒 ②凹凸面 褐色	破片	SK-2 フク土
3	石器 多孔石	長さ：[15.3] 幅：9.7 厚さ：4.7 重さ：1071	片岩製。		一部欠損	SK-2 フク土
4	石器 砥石	長さ：28.0 幅：13.1 厚さ：9.6 重さ：1905	凝灰岩製。棒状のものを研いだ痕跡あり。被熱のためか、黒く焦げている。		一部欠損	SK-2No.1
5	縄文土器 深鉢		単節縄文 (RL) 施文。	①砂礫・黒色鉱物 ②外にぶい黄褐色 内 橙色	口縁部片	SK-3No.7
6	瓦 丸瓦	長さ：[6.8] 幅：[4.8] 厚さ：1.6	凹凸面ナデ。	①白色粒 ②凸 灰黄褐色 凹 にぶい黄褐色	2/3	SK-3 フク土
7	陶器 高台付椀	口径：10.0 底径：4.2 器高：6.8	内外ロクロナデ。高台が貼り付けられている。釉薬がかけられる。		ほぼ完存	SK-3・SK-15 ・SK-3No.9・ 12・フク土
8	石器 磨石	長さ：13.6 幅：7.9 厚さ：3.6 重さ：500	砂岩製。		完存	SK-3No.25
9	石器 打製石斧	長さ：13.4 幅：9.9 厚さ：5.2 重さ：592	頁岩製。		完存	SK-3No.21
10	埴輪 円筒埴輪		外面 5～6本一組のタテハケ。内面 ナデ。	①白色粒 ②内外 橙色	破片	SK-8
11	縄文土器 深鉢		隆帯による三角形区画文。隆帯の両側を深くなぞっている。撚糸文 (R) 施文。	①黒色粒 ②内外 褐色	体部片	SK-9
12	縄文土器 深鉢		連続爪形文。	①小礫・黒色粒 ②外にぶい赤褐色 内 黒褐色	体部片	SK-9 フク土
13	縄文土器 深鉢		単節縄文 (RL) 施文。	①黒色、白色粒 ②内外にぶい黄褐色	口縁部片	SK-10 フク土
14	埴輪 円筒埴輪	突帯は幅：1.7 高さ：0.7	内外ナデ。	①チャート・角閃石 ②内外 橙色	破片	SK-10 フク土
15	石器 磨石	長さ：12.2 幅：9.1 厚さ：8.8 重さ：1265	安山岩製。		完存	SK-10 フク土
16	石器 砥石	長さ：[12.1] 幅：[5.1] 厚さ：3.3 重さ：231	粘板岩製。		一部欠損	SK-12 フク土
17	石器 石皿	長さ：[12.9] 幅：[10.9] 厚さ：6.2 重さ：649	安山岩。側面に穴が開いており、石皿として使用のち転用されたものと思われる。		破片	SK-14 フク土
18	縄文土器 深鉢		隆帯による三角形区画文。単節縄文 (RL) 施文。	①チャート、角閃石 ②内外 褐色	口縁部片	SK-15
19	石器 打製石斧	長さ：[6.5] 幅：5.5 厚さ：2.4 重さ：82	ホルンフェルス製。		一部欠損	SK-15
20	土製品 羽口	高さ：20.3 幅：11.2 厚さ：1.4 重さ：866 (ただし石膏含む。)	外面に溶着滓あり。溶着滓はガラス質の光沢をもつ。	①チャート・小礫・赤色粒 ②内外にぶい黄褐色	3/4	SK-2・14・16 ・SK-16No.10 ・12
21	石器 凹み石	長さ：10.1 幅：8.2 厚さ：3.6 重さ：412	安山岩製。表裏とも窪んでいる。		ほぼ完存	SK-16
22	石器 磨石	長さ：8.4 幅：5.4 厚さ：4.4 重さ：281	安山岩製。		完存	SK-16No.4
23	石器 砥石か	長さ：7.2 幅：3.3 厚さ：1.9 重さ：69	片岩製。ただし窪んでいる部分は、片面のみである。棒状のものを研磨したような窪み方である。		完存	SK-18 フク土
24	縄文土器 深鉢		単節縄文 (RL) 施文。	①角閃石 ②内外 褐色	口縁部片	SK-23 フク土
25	縄文土器 深鉢・突起		刻みを施文。	①白色粒 ②外 褐色 内 明褐色	突起片	SK-23 フク土
26	縄文土器 深鉢・突起		S字モチーフの突起を、土器と貼り合わせている。	①チャート ②外 褐色 内 黒褐色	突起片	SK-23 フク土
27	縄文土器 深鉢・突起		刻みを施文。	①雲母 ②外 黒褐色 内 にぶい黄褐色	突起片	SK-32 フク土

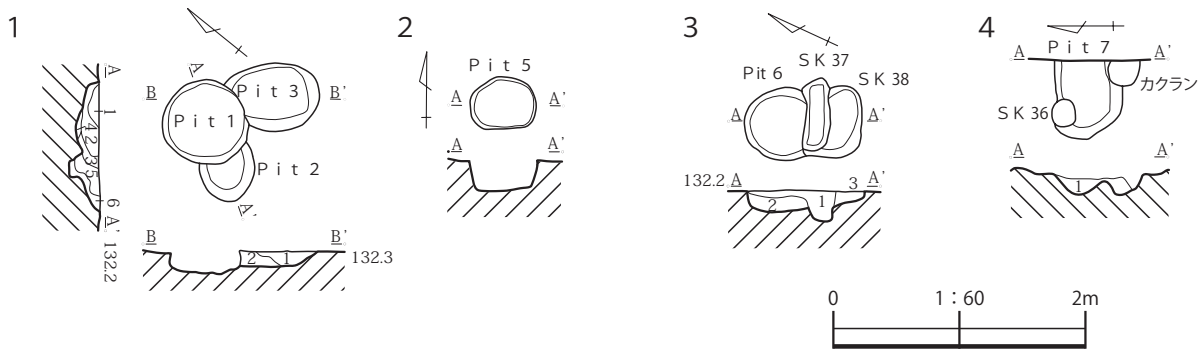
第1表 土坑出土遺物観察表

最大70cmである。

第2項 ピット

第1号ピット (第11図1)

本ピットは調査区東側中央に位置する。第2・3号ピットと重複関係にあり、本ピットが両者よりも新しい。規模は南北70cm、東西65cmを測る。平面形状は円形を呈する。壁は垂直気味に立ち上がり、深さは最大で19cmである。



Pit 1・2 土層説明 (1. SPA-A')

- 第1層 暗茶褐色土 ローム粒、ロームブロックを少量含む。しまり弱く、粘性を有する。
- 第2層 茶褐色土 ローム粒を均一に、ロームブロックを少量含み微量の焼土を混入する。しまり、粘性共に有する。
- 第3層 明褐色土 ロームブロックを多量に含む。しまり、粘性共に有する。
- 第4層 暗灰褐色土 灰褐色粘土を多量に、ローム粒を少量含む。しまり、粘性共に強い。
- 第5層 明黒褐色土 ローム粒を少量含む。しまり、粘性共にやや弱い。
- 第6層 暗茶褐色土 ローム粒、ロームブロックを少量均一に含む。しまり、粘性共にやや弱い。

Pit 3 土層説明 (1. SPB-B')

- 第1層 明黒褐色土 ローム粒、炭化物粒を少量、ロームブロックを微量含む。しまり弱い。粘性なし。

- 第2層 暗茶褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを均一に、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共にやや弱い。

Pit 6、SK 37・38 土層説明 (3. SPA-A')

- 第1層 明黒褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。
- 第2層 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む。しまり、粘性共に有する。
- 第3層 褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む。しまり、粘性共に有する。

Pit 7 土層説明 (4. SPA-A')

- 第1層 黄褐色土層 ロームと明茶褐色土の混合した土質。しまり、粘性共に弱い。

第11図 ピット

第2号ピット (第11図1)

本ピットは調査区東側中央に位置する。第1号ピットと重複関係にあり、本ピットの方が古い。規模は南北30cm以上、東西44cmを測る。平面形状は円形を呈すると思われる。一部分の深いところは23cmとなる。

第3号ピット (第11図1)

本ピットは調査区東側中央に位置する。第1号ピットと重複関係にあり、本ピットの方が古い。規模は南北55cm、東西65cm以上を測る。平面形状は楕円形を呈すると思われる。壁は緩やかに立ち上がり、深さは最大で12cmである。

第5号ピット (第11図2)

本ピットは調査区中央から北東方向に位置する。規模は南北42cm、東西54cmを測る。平面形状は楕円形を呈する。壁は急に立ち上がり、深さは最大25cmである。

第6号ピット (第11図3)

本ピットは東壁中央部分に位置する。規模は南北45cm以上、東西55cmを測る。平面形状は円形を呈すると思われる。壁は緩やかに立ち上がる。一部分の深いところは23cmとなる。

第7号ピット (第11図4)

本ピットは東壁中央部分に位置する。規模は南北 50cm、東西 60cm を測る。平面形状は楕円形を呈すると思われる。壁は緩やかに立ち上がり、深さは最大で 15cm である。

第3項 溝跡

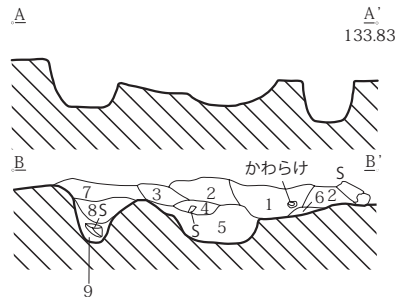
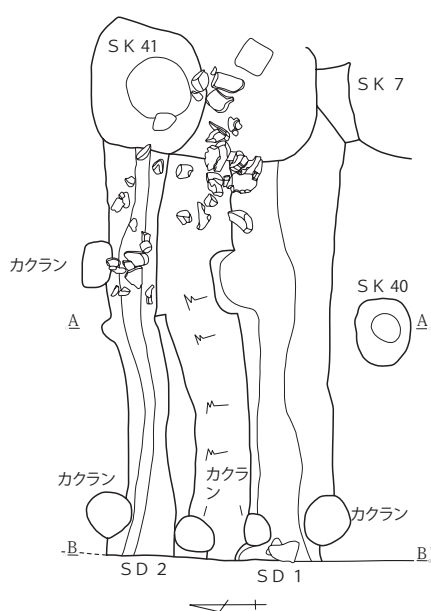
本調査における5本の溝は東から西に若干低くなっており、水の流れも東から西へと流れていたものと思われる。特に第3～5号溝跡は第3号土坑に切られているが、両者は関連しあう可能性がある。なお、出土遺物については、かわらけが溝から出土することが多かったため、第14図2・3も溝跡に伴うものと考えて掲載している。

第1号溝跡 (第12図、図版2)

調査区南西側、第41号土坑南側まで確認できる。所々、攪乱を受けている。確認された規模は東西 3.5m、南北 65～82cm である。壁は緩やかに立ち上がり、深さは 15～20cm となる。礫が出土している。

第2号溝跡 (第12図、第14図3、第2表、図版2・5)

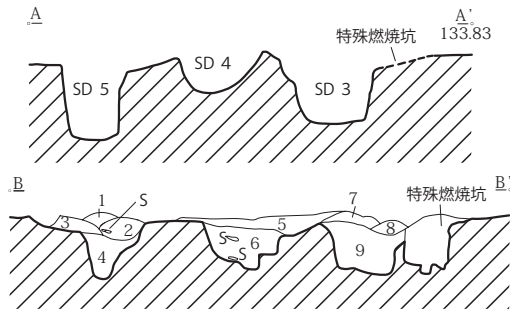
調査区南西側、西壁から第41号土坑に切られるまで、範囲を確認できる。所々、攪乱を受けている。確認された規模は東西 3.2m、南北 40～55cm である。壁は急に立ち上がり、深さは 40cm となる。礫が出土している。遺物は、かわらけが出土している。



SD 1・2 土層説明 (SPB-B')

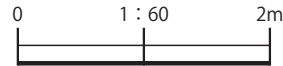
- 第1層 暗褐色土層 ローム粒子を多く含み、 ϕ 1cm未満の炭やかわらけ、礫、ヨウヘキも含む。しまり、粘性共になし。
- 第2層 茶褐色土層 ϕ 1cm未満のローム粒子を含む。小石をまばらに含む。しまりを有する。粘性なし。
- 第3層 暗褐色土層 ローム小粒子をまばらに含み、 ϕ 5mm程度の小石を含む。しまり粘性共になし。
- 第4層 明黒色土層 ϕ 1～5mmローム粒子をまばらに含む。しまりを有する。粘性なし。
- 第5層 黒色土層 ϕ 5mm程度のロームをまばらに含む。しまりを有する。粘性やや弱い。
- 第6層 明茶褐色土層 ローム粒子を多く含み、しまり、粘性共に有する。
- 第7層 明褐色土層 ローム粒子を含み、 ϕ 5mm程度の小石をまばらに含む。しまり粘性共になし。水道管理設溝である。
- 第8層 明黒色土層 ローム粒子を多く含み、ロームブロックもまばらに含まれる。しまりなし。粘性は弱い。
- 第9層 暗茶褐色土層 ローム粒子、ロームブロックを含む。しまり、粘性共にやや弱い。

第12図 溝跡1

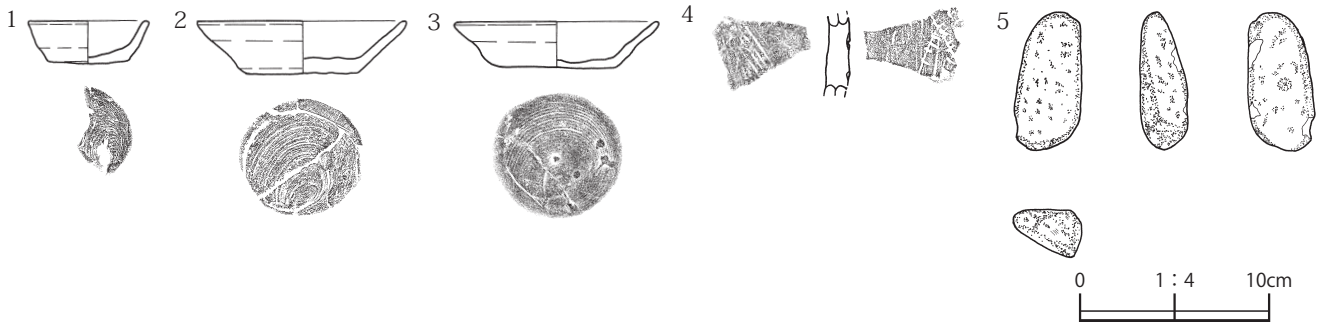


SD 3・4・5 土層説明 (SPB-B')

- 第1層 黒色土層 ローム小粒子をまばらに含む。しまりを有する。粘性やや弱い。
- 第2層 明茶色土層 ローム土を基本とした土層であるが、黒色土も含まれる。しまり粘性共にあり。
- 第3層 ローム層
- 第4層 不明
- 第5層 暗褐色土層 φ 2~5mmのローム粒子を含み、しまり、粘性共にやや弱い。
- 第6層 黒褐色土層 ローム小粒子を多く含む。しまりを有する。粘性やや弱い。
- 第7層 明茶褐色土層 ロームブロックを多く含み、しまり、粘性共にやや弱い。
- 第8層 黒色土層 ロームブロックを多く含み、しまり、粘性共に有する。
- 第9層 明黒色土層 φ 5mm程度のローム粒子を多く含む。しまりやや弱い。粘性を有する。



第13図 溝跡2



第14図 溝跡出土遺物

No.	種別・器種	法量	文様・器面調整・備考	①胎土 ②色調	残存度	注記
1	土師質 かわらけ	口径：(6.2) 底径：4.4 器高：2.3	内外ロクロナデ。底部は回転系切り。	①角閃石 ②内外にぶい褐色	1/3	SD-3・4・5
2	土師質 かわらけ	口径：(11.0) 底径：6.0 器高：2.8	内外ロクロナデ。底部は回転系切り。	①透明、黒色、赤色粒 ②内外 明褐色	1/6、底部 完存	SK-7・SD-5 調査区
3	土師質 かわらけ	口径：10.6 底径：3.4 器高：2.4	内外ロクロナデ。底部は回転系切り。	①透明、黒色粒 ②内外にぶい黄褐色	1/2、底部 完存	SD-2・落ち込み 落ち込みフク土
4	埴輪 人物・形象埴輪か		外面タテハケ。刻線と刻み。内面5本一組と思われるタテハケ。	①白色粒 ②外にぶい橙色 内 橙色	破片	SD-3・4・5
5	石器 浮きか	長さ：7.2 幅：2.6 厚さ：2.5 重さ：32	軽石製。表裏とも磨っている。		完存	SD-3・4・5

第2表 溝跡出土遺物観察表

第3号溝跡（第13図、第14図1・4・5、第2表、図版2・3・5）

調査区西側、西壁から東の方向に確認できるが、第4・5号溝跡と合流し、最後は第3号土坑に切られる。所々、土坑の重複ないし攪乱を受けている。確認された規模は東西2.5m、南北60～80cmである。壁は急に立ち上がるが、西側は段がつく。深さは35cmである。礫が大量に出土している。

第4号溝跡（第13図、第14図1・4・5、第2表、図版2・3・5）

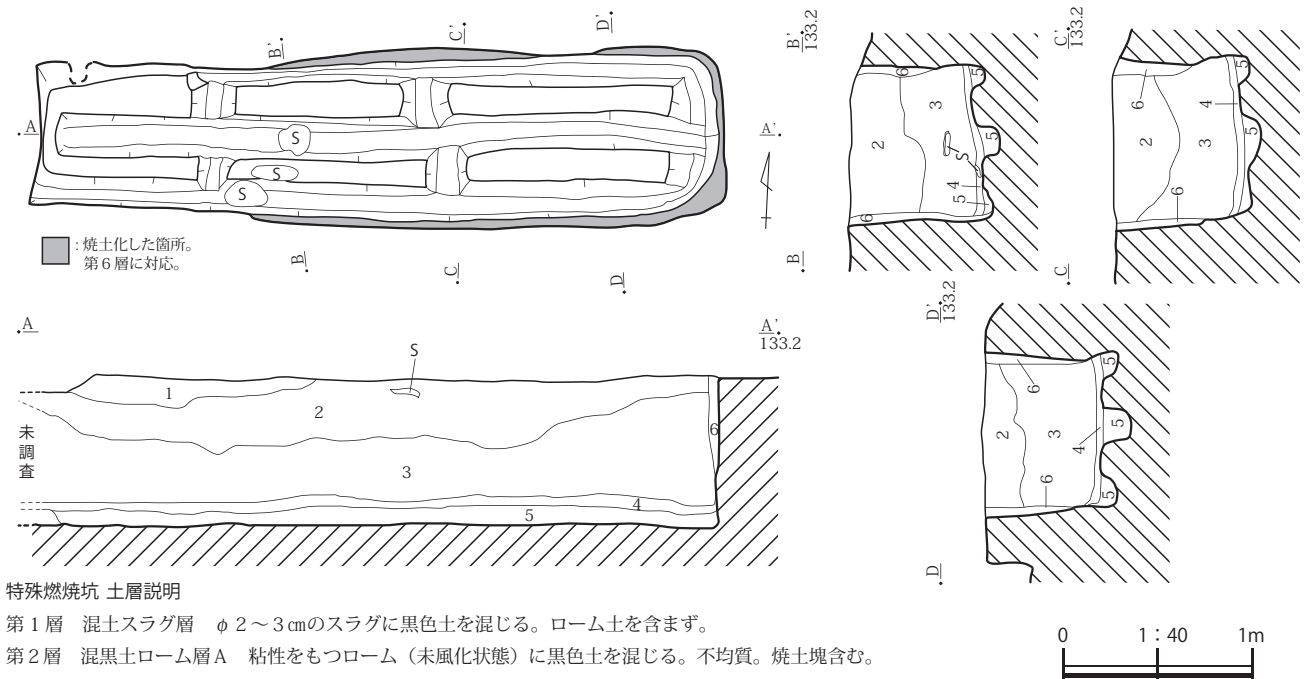
調査区西側、西壁から東の方向に確認できるが、第3・5号溝跡と合流し、最後は第3号土坑に切られる。所々、土坑の重複ないし攪乱を受けている。確認された規模は東西2.3m、南北45～60cmである。壁は急に立ち上がるが、西側は階段状に立ち上がる。深さは30cmである。礫が大量に出土している。

第5号溝跡（第13図、第14図1・2・4・5、第2表、図版2・3・5）

調査区西側、西壁から東の方向に確認できるが、第3・4号溝跡と合流し、最後は第3号溝跡に切られる。所々、攪乱を受けている。確認された規模は東西2.6m、南北40～60cmである。壁は急に立ち上がるが、西側は段がつく。深さは45cmである。礫が大量に出土している。

第4項 特殊燃焼坑（第15図、図版3）

調査区南西側、第2号溝跡と第3号溝跡の間にある。確認された規模は、南北1.8m、東西37～



特殊燃焼坑 土層説明

- 第1層 混土スラグ層 φ2～3cmのスラグに黒色土を混じる。ローム土を含まず。
- 第2層 混黒土ローム層A 粘性をもつローム（未風化状態）に黒色土を混じる。不均質。焼土塊含む。
- 第3層 混黒土ローム層B 粘性をもつローム（未風化状態）に黒色土を混じる。不均質。焼土塊含む。Aより黒土多い。
- 第4層 黒褐色土層 焼土、粘土、スラグ等を含む。粘性に乏しく不均質。
- 第5層 暗橙褐色土層 比較的均質で黒色土含まず少量のスラグを含む。
- 第6層 橙色焼土層 基盤ロームの火熱変化層。

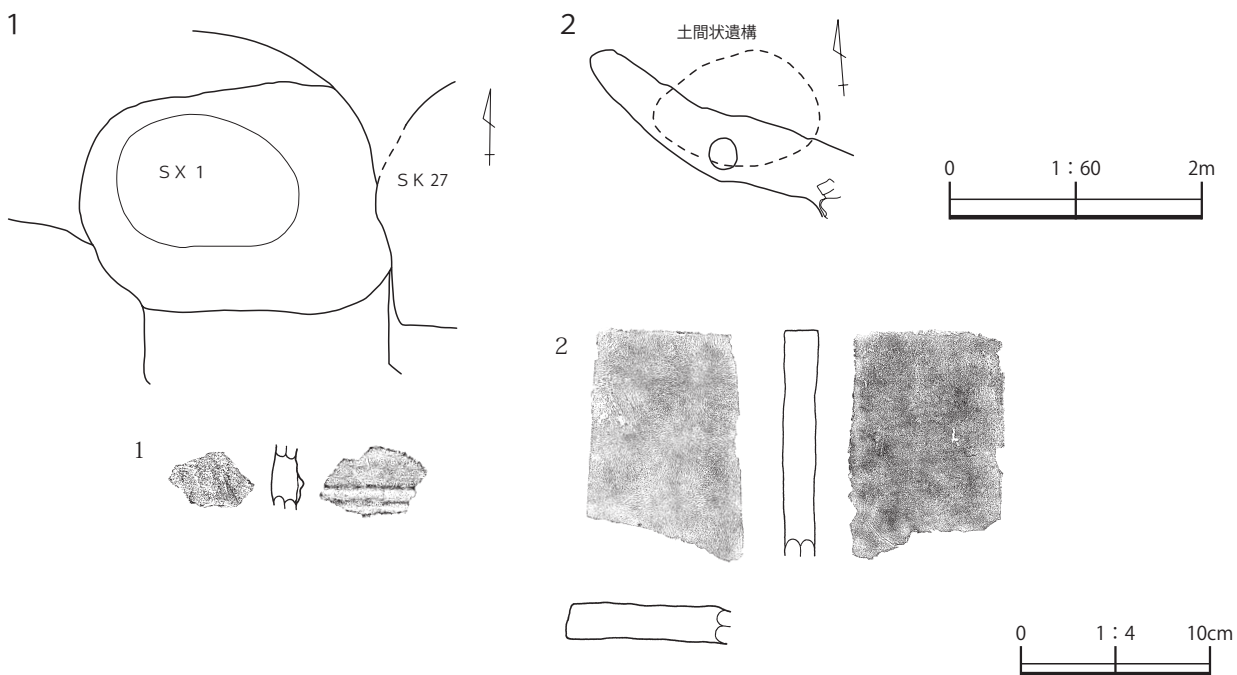
※底面には、暗赤褐色の細砂粒が全面に付着しているが、被熱による面自体の変化は認められない。

第15図 特殊燃焼坑

43cmである。平面形状は長方形を呈する。断面はフラスコ状になっており、深さは溝を含めると35～40cmである。溝は幅10cmほどで深さは5～8cmである。

本坑は、送風を伴う燃焼坑であり、底面にロストル状の通気構造を有している。被熱による赤変は底面には及ばず、鉄分の多い暗赤褐色の細砂が付着している。この細砂は、基本的には第5層と同一のものであり、この施設の操業に関わる堆積層である。直接被熱した赤変は、本坑東側のトーン範囲であり、西側は被熱の痕跡はあるものの橙色の焼土に移行していない。これは送風構造にかかわるものと推定し得るが、送風孔は検出されていない。覆土の状態は、第4層が本坑の機態に関わる二次堆積土と考えられる。だが第2・3層中には、1～3cm大の焼土塊を含むとはいえ、基本的には未風化のローム質土が充填し、ローム塊との境も明瞭で分解しておらず、埋め戻された状況を呈している。

また、本層群は上下に区分し得るとはいえ、相対的であり基本的に同一の層群と捉えるべきものである。この層群中の黒色土には壁（第6層）の崩壊土や焼土・炭化物粒の混入が稀であり、周辺表土の流入や埋め戻しでなく、他地点の掘削土を充填した状況と考えてよい。内部に検出された3個の礫は、第4層上に乗るもので、第一次的に本施設に関わる位置関係をとるものではないが、埋め戻し前に本坑の周囲に存在していたものであろう。第1層は第2層に乗るもので、その境界は明瞭であり連続推移する堆積が認められないところから、直接本坑に関わるものなら、埋め戻し前の周辺環境に関わるものである可能性は否定し切ることができない。本坑は、北側の土間状遺構に主軸が合い、同時期



第16図 その他の遺構と出土遺物

No.	種別・器種	法量	文様・器面調整	①胎土 ②色調	残存度	注記
1	埴輪 円筒埴輪	突帯は幅：1.4 高さ：0.6	内外ナデ。	①角閃石 ②内外 橙色	破片	落ち込みフタ土
2	瓦 平瓦	長さ：[9.0] 幅 [8.0] 厚さ：1.8	凹凸面ナデ。	①黒色粒 ②内外 褐灰色	破片	土間状遺構 No.1

第3表 その他の遺構出土遺物観察表

に機能した可能性があるが、両遺構を被覆する土層が新しく、相互の関係を明らかにすることはできない。なお本坑は西側に更に続いており全体の形状は不明である。

第5項 その他の遺構

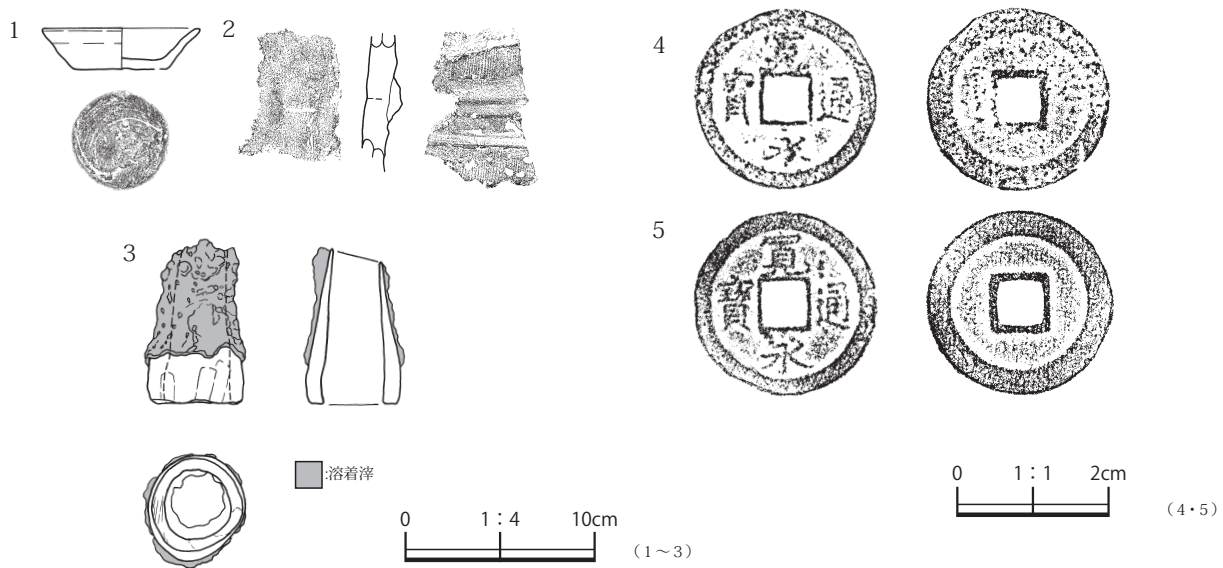
第1号性格不明遺構（第16図1、第3表、図版5）

本遺構は南壁中央付近に位置する。規模は南北1.8m、東西2.3mを測る。平面形状は楕円形を呈する。

土間状遺構（第16図2、第3表、図版5）

本遺構は西壁北側付近に位置する。規模は南北1.0m、東西1.2mを測る。平面形状は楕円形を呈する。

第6項 遺構外出土遺物（第17図、第4表、図版5）



第17図 遺構外出土遺物

No.	種別・器種	法量	文様・器面調整・備考	①胎土 ②色調	残存度	注記
1	土師質 かわらけ	口径：(8.2) 底径：3.1 器高：2.2	内外ロクロナデ。底部は回転系切り。2次焼成の痕あり。	①角閃石 ②内外 橙色	1/3・底部 完存	西壁 No.1
2	埴輪 円筒埴輪	突帯は幅：1.9 高さ：0.6	外面7～8本一組のタテハケ。内面ナデ。	①砂礫・角閃石 ②内外 橙色	破片	杭 BM-1 フク 土
3	土製品 羽口	高さ：8.7 幅：5.3 厚さ：0.8 重さ：116	内外ナデの痕跡わずかに残る。外面に溶着滓あり。溶着滓はガラス質の光沢をもつ。	①チャート ②にぶい黄橙色	3/4	なし
4	銭貨 寛永通宝	直径：2.3 重さ：3.0			完存	なし
5	銭貨 寛永通宝	直径：2.4 重さ：3.0			完存	なし

第4表 遺構外出土遺物観察表

第Ⅳ章 まとめ

大字金屋地内のスラグ分布状況については、中世「児玉」に接する区域としての狭義の「金屋」に濃密に分布し、今日の「倉林」集落周辺あるいは倉林東遺跡の谷あたりまでは粗密はあるものの一定量が分布するようである。分布は更に、大字児玉の南東の一部や大字長沖の北側の一部にまで及ぶ。スラグの分布する区域は、狭義の「金屋」区域に近いことは注目しておくべき点であるという。このことは、何らかの形で「金屋鋳物師」の活動にかかる、土地に対する用益の及ぶ範囲の歴史的累積に関わるものと推定されている（鈴木徳雄 2005）。

このように金屋地区は鋳物業が盛んな地域であったため、本調査区でもそれに関係すると思われる遺構・遺物が僅かに検出されている。第3号土坑からは溶着滓の付着した羽口が出土し、遺構外出土遺物にも羽口が見られる。そして第30号土坑からはスラグが集中して出ており、廃滓場が想定できる。

問題は本調査における第3号土坑などが、鋳物業と関係あるかである。この土坑は第3～5号溝跡と接していることから、両者は密接な関係があると思われる。また第2・16号土坑や第1・2号溝跡なども、礫が伴うことや規模が似ていることなど、第3号土坑や第3～5号溝と同じ性格のものと考えられる。第2・3・16号土坑には下層に礫が敷かれている。これは製鉄炉などにおける、湿気を防ぐための地下構造に似ているが、土坑内に粘土を貼っていないようであることなど、一般に炉の地下構造として紹介されているものとは異なる。推論の域を出ないが、金屋地区の歴史的背景を考慮すれば、これらの土坑は炉（溶解炉）と考えられる。また、第3・4・5号溝跡は炉内から出た水を流すための、排水溝であると考えられる。溝の傾斜も第3号土坑のある東側から西側へ若干低くなっており、水の流れを想定できるからである。土間状遺構や粘土（タタキ状）の範囲も、これらの土坑や溝に近いところにあり、工房の床面であった可能性がある。また特殊燃焼坑が土間状遺構の主軸と合うことから、この施設もまた、工房に関係するものの可能性がある。

遺構の観点からは、工房跡である可能性が僅かながらも示唆できるものの、鋳物に関する資料の出土が乏しい。鋳物業廃業の際、きれいに引き払われたためなのか、スラグ以外には鋳型や坩堝、甑炉などは出土しておらず、遺物の観点からは、本遺跡の性格を結論付けるに至らなかった。今後の発掘調査により、金屋鋳物師の実態が解明されることが期待される。

参考文献

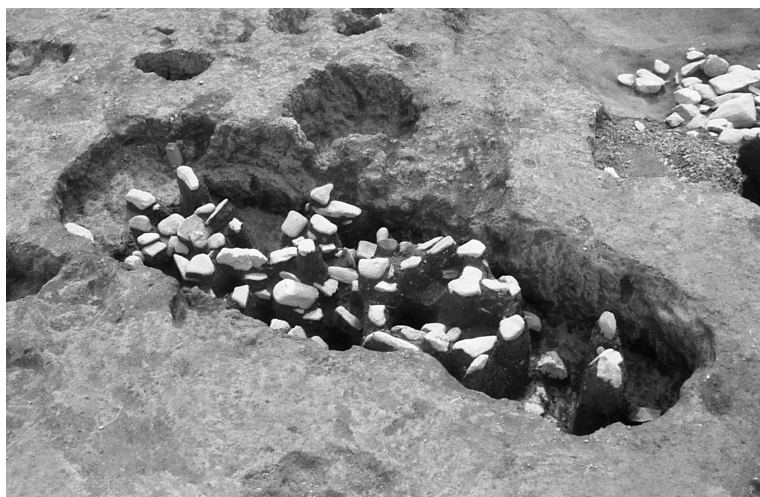
- 今福利恵（2008）「勝坂式土器」『総覧 縄文土器』（株）アム・プロモーション pp.392-401
- 大熊季広・松澤浩一（2003）『長沖古墳群Ⅳ 第42号墳の調査—町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書 32』児玉町文化財調査報告書第37集 児玉町教育委員会
- 神崎 勝（2006）「第3部 鋳造遺跡とその変遷」『冶金考古学概論』雄山閣 pp.219-346
- 恋河内昭彦（2003）『金屋西遺跡（A・B地点の調査）』本庄市遺跡調査会報告書第13集 本庄市遺跡調査会
- 恋河内昭彦（2006）『金屋下別所遺跡B地点 塩谷平氏ノ宮遺跡 塩谷下大塚遺跡E地点 県営中山間地域整備事業（秋平・阿久原地区）ほ場整備（篠の池地下区）に伴う発掘調査報告書 本庄市遺跡調査会報告書第11集 本庄市遺跡調査会
- 児玉町教育委員会・児玉町史編さん委員会（1993）『児玉町史 自然編』児玉町
- 児玉町教育委員会・児玉町史編さん委員会（1995）『児玉町史 民俗編』児玉町
- 埼玉県（1988）『新編埼玉県史 通史編2 中世』埼玉県
- 柴田常恵（1936）「金屋の鋳物師中林氏」『埼玉史談』第8巻第2号 埼玉郷土会 pp.77-85
- 鈴木徳雄（1981）『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書第2集 児玉町教育委員会
- 鈴木徳雄（2005）「第Ⅴ章 児玉丘陵における地域社会の形成—「金屋」地区における土地利用形態の遷移—」『高柳原遺跡 町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書 34』児玉町文化財調査報告書第39集 児玉町教育委員会 pp.77-110
- 鈴木徳雄（2007）「第Ⅳ章 長沖古墳群の形成と共同用地域—児玉郡地域における古墳群の形成（予察）」『長沖古墳群Ⅶ—久保地区B地点の調査—』本庄市遺跡調査会報告書第14集 本庄市遺跡調査会 pp.23-33
- 細田 勝（2008）「加曾利E式土器」『総覧 縄文土器』（株）アム・プロモーション pp.410-417



調査区全景（南西から）



第8号土坑完掘状況（北から）



第15号土坑礫出土状況（北から）



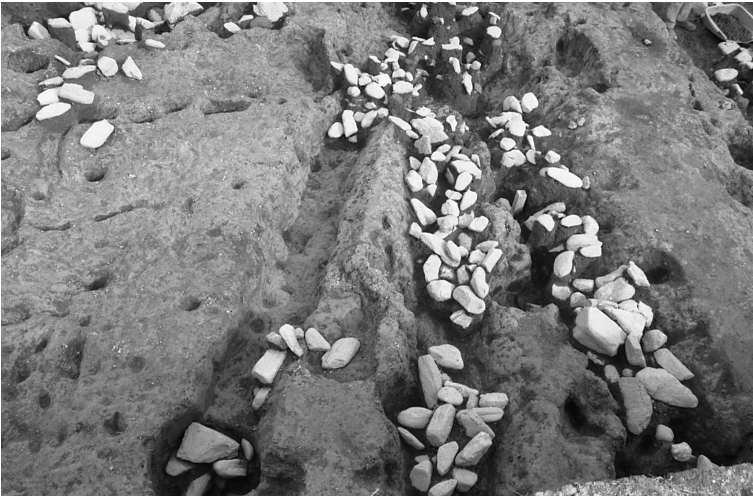
第 16 号土坑礫出土状況（東から）



第 31 号土坑完掘状況（南西から）



第 1 ~ 5 号溝および第 3 号土坑
礫出土状況（東から）



第3～5号溝礫出土状況（西から）

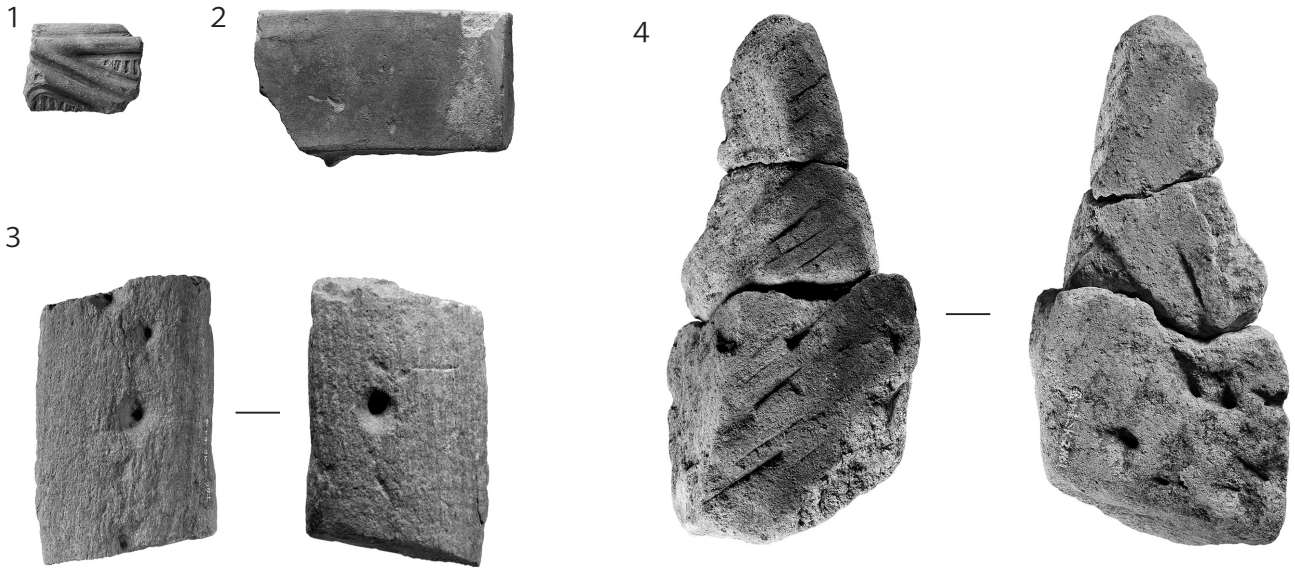


特殊燃焼坑礫出土状況（東から）



特殊燃焼坑完掘状況（西から）

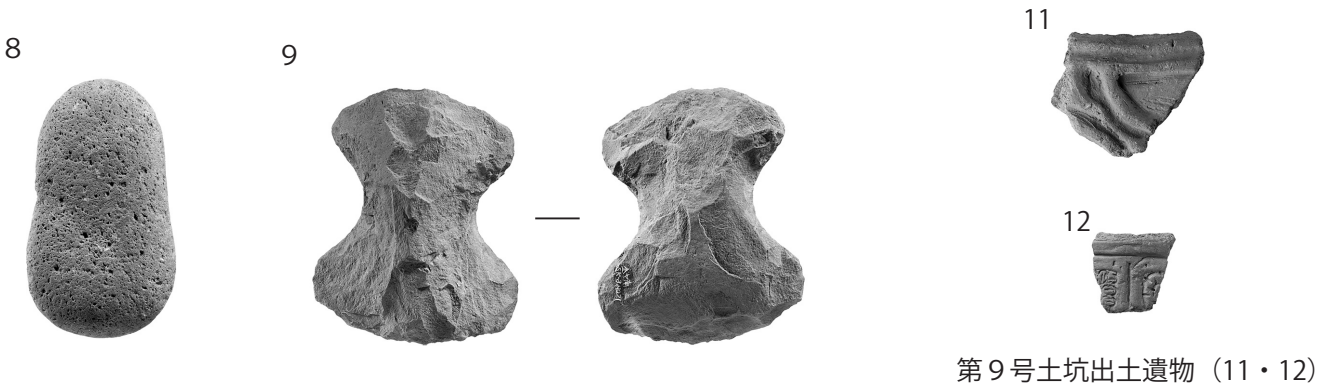
图版 4



第 2 号土坑出土遺物 (1 ~ 4)



第 8 号土坑出土遺物 (10)



第 9 号土坑出土遺物 (11 · 12)

第 3 号土坑出土遺物 (5 ~ 9)

第 14 号土坑出土遺物 (17)



第 10 号土坑出土遺物 (13~15)

第 12 号土坑出土遺物 (16)

18



19



23



24



25



26



第15号土坑出土遺物 (18・19)

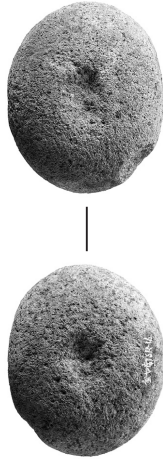
第18号土坑出土遺物 (23)

第23号土坑出土遺物 (24~26)

20



21



22



第16号土坑出土遺物 (20~22)

27



第32号土坑出土遺物 (27)

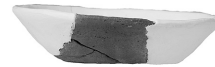
1



2



3



5



第2号溝出土遺物 (3)、第5号溝出土遺物 (2)、第3・4・5号溝出土遺物 (1・4・5)

4



1



第1号性格不明遺構出土遺物 (1)

2



土間状遺構出土遺物 (2)

1



2



3



4



5



遺構外出土遺物 (1~5)

報 告 書 抄 録

フリガナ	カナヤミナミイセキ							
書 名	金屋南遺跡							
副 書 名								
シリーズ	本庄市遺跡調査会報告書				巻 次	第32集		
編 集 者	向出博之							
編 集 機 関	本庄市遺跡調査会							
所 在 地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号				TEL 0495-25-1185			
発 行 日	西暦2010年(平成22年)8月31日							
フリガナ	フリガナ	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
所収遺跡	所 在 地	市町村	遺 跡	(° ' ")	(° ' ")			
カナヤミナミイセキ 金屋南遺跡	ホンジョウシコダマチヨウ 本庄市児玉町 カナヤアザミナミ 金屋字南51-4他	112119	57-84	36° 11' 2"	139° 7' 44"	19930721 ～ 19930930	330.26㎡	住宅建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
金屋南遺跡		縄文時代			縄文土器・石器			
		古墳時代			埴輪			
		中 世			かわらけ			
		近・現代	特殊燃焼坑1 溝跡5		陶器、寛永通宝、羽口		特殊燃焼坑・溝跡・羽口は、金屋鋳物師に関連する遺構と遺物の可能性がある。	
	不 明	土坑46				第2・3・16号土坑は、金屋鋳物師に関連する遺構である可能性がある。		

本庄市遺跡調査会報告書第 32 集

金屋南遺跡

平成 22 年 8 月 31 日 印刷

平成 22 年 8 月 31 日 発行

発行／本庄市遺跡調査会
埼玉県本庄市本庄 3 丁目 5 番 3 号
(本庄市教育委員会文化財保護課内)

印刷／上毎印刷工業株式会社